

和歌山県橋本市の盆棚

藤井 弘章

はじめに

筆者は『民俗文化』三一号において、和歌山県高野町の盆棚について分析を試みた〔藤井 二〇一九〕。筆者は高野町における調査ののちも、和歌山県において盆行事調査を継続している。すでに膨大なデータが集まっているが、紙数の関係もあるため、本稿では高野町に隣接する和歌山県橋本市の盆棚および盆行事を取り上げる。現在の橋本市は、平成一八年（二〇〇六）、旧橋本市と高野口町が合併して誕生した。筆者は、平成二八年（二〇一六）八月を中心に旧橋本市、平成二九年（二〇一七）八月を中心に旧高野口町において盆調査をおこなった。旧橋本市では平野・下兵庫・胡麻生・野・向副・清水、旧高野口町では上中・名倉・大野・向島・伏原において調査を実施した。⁽¹⁾高野町の場合のように、自治体史などとしての調査ではないため、全集落の悉皆調査にはなっていない。調査地は、紀ノ川の北岸・南岸、江戸時代の紀伊藩領・高野領、などにおける地域差を配慮して選定した。⁽²⁾

一 橋本市の概要

1 橋本市の地理・歴史

橋本市は、和歌山県の北東部に位置し、東は奈良県五條市、西はかつらぎ町、南東は高野町、南西は九度山町、北は大阪府河内長野市と接している。ほぼ中央を紀ノ川が西へ流れている。⁽³⁾紀ノ川流域に平野部が広がり、北部には和泉山脈、南に紀伊山地へと連なる山が迫っている。平野部は標高一〇〇～二〇

〇mの河岸段丘部と、それ以下の低位洪積台地と氾濫原からなっている。

古代には、紀ノ川を通じて大陸の文化が大和へ入る経路にもなり、飛鳥などの都に近いために中央の文化の影響を強く受けてきた。律令制が施行されると、この地方は紀伊国の伊都郡となり、紀ノ川に沿って東西に南海道が通った。平安時代になると、橋本市の南側に位置する山地には、空海（弘法大師）によつて高野山金剛峰寺が開かれた。橋本市域は、高野山への物資供給の拠点として、また、京都などからの高野参詣の通路としての役割を果たすことになった。

平安時代には、旧橋本市域の東部に隅田^{すだのしょう}荘、西部に相賀^{おうがのしょう}荘が成立した。いずれの荘園も紀ノ川を挟んで南北に広がっていた。中世前期、隅田荘の領主は石清水八幡宮、相賀荘の領主は根来寺であったが、鎌倉時代後期ごろになると、高野山金剛峰寺が「弘法大師御手印縁起」にもとづいて、紀ノ川南岸地域の領有を強く主張するようになった。そのため、中世後期には、隅田北荘は石清水領、隅田南荘は高野山領、相賀北荘は根来寺領、相賀南荘は高野山領となった。旧高野口町のほぼ全域は、当初から高野山を領主とする官省符^{かんしょうふ}荘に属していた。隅田荘・相賀荘と同様に、紀ノ川を隔てて南側の九度山町の平野部と一体の荘園であった。官省符荘には、高野山上および荘園の事務などを司る高野政所（現在の九度山町に立地）が置かれていた。高野政所には紀ノ川の水運を利用して年貢・物資が集積され、高野山上に運ばれる中継点に位置していた。したがって、官省符荘は高野山領膝下荘園の中でも中核的な荘園で

あつた。

その後、豊臣秀吉により、高野寺領は大きく削減され、伊都郡・那賀郡の紀ノ川南岸から有田郡境にかけての地域が寺領として安堵された。徳川家康もその所領を安堵し、その後にわずかな加増はあつたが、基本的には幕末まで高野寺領は存続した。したがって、江戸時代の橋本市域では紀ノ川北岸は紀伊藩領であつた。ただし、南岸はすべて高野寺領となつたわけではなく、恋野や学文路などは紀伊藩領とされた。橋本市域で高野寺領となつたのは、清水・馬場・西畑・東畑・向副・賢堂・横座・中道の八か村で、河根（現在の九度山町）を加えて清水組と称した。

一六世紀末には、豊臣秀吉の信任を得た高野山の応其上人によつて橋本町が開かれ、橋本・向副間の紀ノ川に橋が架けられた。橋本という地名は、この橋に由来するという。この地は、東西の伊勢街道（大和街道）と南北の高野街道が十字に交わり、紀ノ川の舟運が重なる交通の要衝であつたため、江戸時代には宿場町・市場町として発展した。応其の掛けた橋は三年後に流され、その後は、江戸時代を通じて、橋本・東家と向副・賢堂・清水の間には渡しが存在した（写真1）。京・大坂方面から高野山を目指す参詣者たちは、東高野街道を通つて橋本に至り、この渡しを渡つて高野山へと登つた。

明治時代初期には、現在の橋本市域の高野寺領の村は、いったん堺県・五條県となつた。明治四年（一八七二）には、紀伊藩領の村とともに和歌山県に属することになった。明治二年（一八八九）の市制町村制施行により、旧橋本市域には、橋本町（橋本・東家など）・隅田村（下兵庫・中島・芋生・平野・山内など）・恋野村（恋野・彦谷・北宿・南宿など）・山田村（山田・野・神野々・出塔など）・紀見村（胡麻生など）・学文路村（学文路・向副・賢堂・清水・南馬場など）が成立し、岸上村は一村で存続した。旧高野口町

域では、名倉村（名倉・大野）・応其村（名古曾・伏原・小田など）・信太村（上中・下中・九重など）が成立し、端場村は一村で存続した。明治四三年（一九一〇）、名倉村に町制が施行され、高野口町が成立した。

明治以降の鉄道の開通は、橋本市域にさまざまな影響を与えたが、とくに高野山への参詣ルートは大きく変化することになった。まず整備されたのは、和歌山市から橋本を経由して奈良県五條方面に至る東西の鉄道であつた。JR和歌山線の前身である紀和鉄道は、明治三年（一八八九）には五條・橋本間が開通、同三年（一九〇〇）には和歌山・五條間が全線開通した。名倉駅（現在の高野口駅）は翌三四年（一九〇一）に開業している。紀和鉄道は明治四〇年（一九〇七）に国鉄和歌山線となつた。これによつて、高野口駅は高野山参詣の玄関口となり、昭和初期に極楽橋・高野山へと鉄道・ケーブルが延伸するまで、高野山への参詣客で賑わつた。

一方、大阪から橋本に至る南北の鉄道は、和泉山脈を越える必要があつたため少し遅れて整備された。南海高野線の前身である高野登山鉄道は、大正四年（一九一五）に紀見峠トンネルを完成させ、汐見橋（現在の大阪市浪速区）から橋本駅まで開通させた。大正十一年（一九二二）には、南海鉄道高野線となり、同一三年には九度山まで延長され、同一四年には高野下（九度山町推出）まで開通した。その後、昭和四年（一九二九）には、高野山電気鉄道が九度山・極楽橋間を開通させ、翌五年（一九三〇）には極楽橋・高野山間の鋼索線（ケーブル）を開通させて高野山まで鉄道で登ることができるようになった。このように、高野山へ向かう鉄道が整備されると、高野参詣客は橋本や高野口の町で降りることなく、高野山へと登っていくことになった。

その後の行政区分としては、昭和二年（一九五四）、隅田村・恋野村が合併して隅田村になり、同三〇年（一九五五）、橋本町・岸上村・山田村・紀見

村・隅田村・学文路村が合併し、橋本市となる。昭和二十七年（一九五二）に、其村に端場村を編入、同三〇年（一九五五）に高野口町・応其村・信太村が合併して高野口町となった。平成一八年（二〇〇六）には、橋本市と高野口町が合併し、現在の橋本市が誕生した。

昭和五〇年代以降、大阪市内へ鉄道で一時間以内という地の利を生かし、旧橋本市の北部山間部の南海沿線に林間田園都市が開発された。平成一八年（二〇〇六）には、市域の北部山間部を東西に貫通するように京奈和自動車道が部分開通した。昭和後期までは、橋本駅・高野口駅周辺および、国道二四号線沿いを中心に商店などが集まっていた。しかし、近年では、旧橋本市北部山間部の住宅地開発、京奈和自動車道および、それと連結する市内の道路の整備によって、市民の間では自動車での移動が中心となり、北部山間部に郊外型の大型ショッピングセンターなどができ、市内全域の景観が大きく変貌してきている。高野参詣客では、鉄道以外に京奈和自動車道を利用して、西高野街道（かつらぎ町）経由で高野山へと登る人が増えているようである。

一方では、平成一六年（二〇〇四）に「紀伊山地の霊場と参詣道」として、高野山金剛峰寺・丹生都比売神社・慈尊院・丹生官省符神社・町石道がユネスコの世界遺産に登録され、平成二八年（二〇一六）には、参詣道として黒河（くろく）道・京大坂道不動坂・三谷坂・女人道が追加登録された。このことによって、橋本市を含む高野山麓地域では、世界遺産をアピールしつつ、古くからの参詣道を歩いたり、古道を中心とした歴史と文化を発信する試みが、自治体のみならず地元の人々の間で活発になっている。

2 旧橋本市の調査地

隅田町平野は紀ノ川北岸で橋本市域の東北隅にあたる。和泉山脈から南流す

る落合川を境にして奈良県五條市と接している。中世には隅田荘（北）、江戸時代は紀伊藩領の集落で、明治二三年には隅田村、昭和三〇年からは隅田町をつけて橋本市の大字となった。落合川沿いに人家が集中し、水田が広がっている。山間部であり、住宅地などの開発がみられないため、昭和初期から戸数（四七軒）の増減はないという。平野には真言宗の時光寺がある。現在は無住であるため、盆などには隅田町山内の寿福寺の僧侶が檀家回りをし、時光寺の行事をおこなっている。

隅田町下兵庫は橋本市域の中央部で紀ノ川北岸に位置する。中世には隅田荘（北）、江戸時代は紀伊藩領の集落で、明治二三年には隅田村、昭和三〇年からは隅田町をつけて橋本市の大字となった。紀ノ川近くの平野部（低位段丘面）を大和街道が通り、街道沿いに人家が立ち並ぶ。周囲は水田が広がっている。地区の範囲としては平野部から丘陵部まで南北に細長く伸びている。現在でも国道二四号線・JR和歌山線が東西に通っている。交通に便利な地区であるため、現在では店舗や住宅が増加している。下兵庫には真言律宗の利生護国寺、真言宗の地藏寺がある。地藏寺は無住のため、盆行事などは利生護国寺の僧侶が担当している。

胡麻生は紀ノ川北岸に位置し、中世には相賀荘（北）に属し、江戸時代は紀伊藩領であった。明治二三年には紀見村、昭和三〇年からは橋本市の大字となった。全体に丘陵部であるが、川や池などを利用して水田や畑が広がっていた。現在ではおもに丘陵部分を大規模に開発し、古くからの集落を取り囲むように住宅地が立ち並んでいる。胡麻生には真言宗の大師寺がある。現在は無住であるため、盆などには境原（小峰台）の小峰寺の僧侶が檀家回りをしている。

野は紀ノ川北岸に位置し、中世には相賀荘（北）に属し、江戸時代は紀伊藩

領であった。明治二二年には山田村、昭和三〇年からは橋本市の大字となった。丘陵部の南端を大和街道および、国道二四号線・JR和歌山線が通っている。古くからの集落であるが、市街地に近く、交通が便利なため、新しい住宅地や店舗もみられる。野には真言宗の寿命寺があり、盆などにはこの寺の僧侶が檀家回りをする。

向副は紀ノ川南岸に位置し、橋本市中心部の対岸にあたる。中世には相賀庄（南）に属し、江戸時代は高野寺領であった。明治二二年には学文路村、昭和三〇年からは橋本市の大字となった。平地には水田、傾斜地には柿畑などが広がっている。集落南側の山麓を南海高野線が通る。古くからの集落であるが、市街地に近いため、新しい住宅地もみられる。向副には真言宗の観音寺がある。現在は無住のため、盆などには賢堂の定福寺の僧侶が檀家回りをする。

清水は紀ノ川南岸に位置する。中世には相賀庄（南）に属し、江戸時代は高野寺領であった。明治二二年には学文路村、昭和三〇年からは橋本市の大字となった。江戸時代には北岸の東家から渡し船があった。現在でも、渡し場跡から高野街道沿いに人家が立ち並んでいる。水田や柿畑なども広がるが、高野街道沿いの物資集積地として栄えた。古くからの集落であるが、南海高野線の紀伊清水駅があるため、新しい住宅地もできた。清水には真言宗の永楽寺があり、盆などにはこの寺の僧侶が檀家回りをする。

3 旧高野口町の調査地

上中は高野口町の北部に位置し、標高二〇〇m前後の台地上にある。中世には官省符荘に属し、近世には紀伊藩領であった。江戸初期、中村が上中村・下中村に分村して成立した。明治二二年には信太村、昭和三〇年からは高野口町の大字となった。真言宗の弘法寺があるが無住のため、名倉の地藏寺の檀家

となっている。

名倉は高野口町の南部に位置し、東は名古屋、南は向島、西は大野に接する。中世には官省符荘に属し、近世には紀伊藩領であった。明治二二年には名倉村、同三四年から高野口町、平成一八年に橋本市となった。高野口駅の南、国道二四号線の北に位置する。人家が密集し、商店街・住宅が立ち並び、旧高野口町の役場、官公庁の支所などが立地する旧高野口町の中心地として栄えた。名倉を中心にして、明治時代には綿ネル製造、大正時代以降にはシル織などの織物製造が盛んとなった。高野口駅の南の住宅街に真言宗の地藏寺がある。

大野は高野口町の南西端に位置し、東は名倉の市街地、西は嵯峨谷川を挟んでかつらぎ町、南は紀ノ川を隔てて九度山町に接している。中世には官省符荘に属し、近世には紀伊藩領であった。明治二二年には名倉村、同三四年から高野口町、平成一八年に橋本市となった。現在でも織物工場が立地している。西部には水田が残り、東部は住宅が密集した商工業地帯となっている。真言宗の大日寺がある。大野では江戸時代から、高野山奥之院に野菜を納める「御番」という行事が続いてきた〔日野西 一九九八〕。

向島は高野口町の南端に位置し、東は小田、北は名倉・大野、南は紀ノ川を隔てて九度山町と接している。紀ノ川氾濫原で、元来は小田・名倉に属するやせた畑地であった。明治三四年の名倉駅開設後、高野参詣の沿道となったが、大正一一年に従来の木橋に代わって鉄橋が架設され、高野口駅から九度山へと至る道路が拡張されると、沿道に人家が密集し、高野参詣の商業地域となった。昭和二八年以降、高野口町の大字として成立した。南海高野線開通後は参詣道としての機能はなくなったが、名倉に隣接する商工業・住宅地帯として人家が密集し、織物工場も立地している。

伏原は高野口町の南東端に位置し、西は名古屋・小田、北は応其、東は神

野々（旧橋本市）、南は紀ノ川を隔てて学文路（旧橋本市）と接している。中世には官省符荘に属し、近世には紀伊藩領であった。中世の高野街道は、神野々から伏原付近を通り、九度山に渡ったと推定されている。明治二年には応其村、昭和三〇年から高野口町、平成一八年に橋本市となった。国道二四号線が伏原のほぼ中央を北東から南西に通る、周辺に大規模小売店や新興住宅地が開発されているが、もともとの集落の中心はもう少し南側にある。織物工場も立地している。昭和中期までは集落周辺に水田が広がっていた。真言宗の普門院がある。

二 橋本市の盆行事

1 先行研究

橋本市域では、複数の文献において、盆行事に関する記述がみられる。大正時代にはすでに『和歌山県伊都郡誌』（以下、『伊都郡誌』と略す）のなかで取り上げられている。「第九編 民俗誌」「第一章 気風 風俗習慣」「第三節 年中行事」の中に「盆」が挙げられており、旧暦の七月の行事として、七日の七夕から紹介されている（和歌山県伊都郡役所 一九一八）。

昭和初期に刊行された『隅田村誌』にも記述がある（伊都郡隅田第一尋常高等小学校 一九三二）。第二編「民俗誌」の「年中行事」に「盆」という項目がある。後述するように、新仏の棚、無縁仏の棚に関する記述もみられる。

昭和中期には、橋本歴史研究会の宮本佳典などを中心に、地元の盆行事の調査がおこなわれており、「釜蓋朔日（カマブタツイタチ）の習俗」、「盆道つくり」、「新盆について」、「七日盆について」、「七夕について」、「盆花と盆市」、「生御霊（イキボン）について」、「盆棚について 十三日」、「仏迎え（ムカエボン） 十三日」、「盆祭について」、「送り盆について」という項目で中間報告

がされている（宮本 一九六六）。その後は、平成の合併前の自治体史において取り上げられている。『高野口町誌 下』には「第8編 民俗」「第1章 年中行事」「第7節 七月の行事」の中に「七夕」・「孟蘭盆」・「盆踊」・「土用入り」などの項目がある（高野口町誌編纂委員会 一九六八）。『橋本市史 下』には「民俗編」「第1章 行事・習俗」「一年中行事」「盆行事」の中に、「七夕」・「孟蘭盆」・「紀ノ川祭」・「盆踊り」・「養父入り」という項目があり、『伊都郡誌』に近似した記述となっている（橋本市史編さん委員会 一九七五）。また、学文路中学校の郷土学習の一環としてまとめられた冊子にも学文路地区の盆行事が紹介されている（橋本市立学文路中学校 一九七七・一九七八）。

平成時代に入ると『橋本市史 民俗・文化財編』に詳しく紹介されている。ここには、第七章「年中行事と祭り」の中で、「5 盆の行事」として取り上げている。「先祖迎え」・「孟蘭盆」・「先祖送り」・「火トボシ」・「地藏盆」という項目が挙げられ、全体的な特徴がまとめられている。四ページに凝縮して地域の盆行事の概要を紹介しているため、個別の事例の詳細は不明な点も多いものの、これまでの文献に比べると具体的な内容が多い（橋本市史編さん委員会 二〇〇五）。

このほか、橋本市域の盆行事としては、モライマツリ・オハライ・ムセマイリに関する報告や研究もある。モライマツリとは、新仏の祭祀を、死者の出た家だけでなく、死者と血のつながる親族の家でもおこなうことである。こうした習俗について、民俗学者の高谷重夫は盆棚の観点から報告している（高谷 一九八八）。同じく民俗学者の森本一彦は家族・親族制度の観点からモライマツリに注目し、盆前に生家から離家した者が生家へ帰るオハライ・ムセマイリという習俗にも注目している（森本 二〇〇〇）。高谷、および森本によると、モライマツリ・オハライ・ムセマイリは、橋本市域などの紀ノ川流域に分布し

ている。

六斎念仏に関する報告もある。六斎念仏は、高野山麓において、盆の仏迎え・仏送りや葬送儀礼の際に唱えていたものである。橋本市域では清水・賢堂・野の三か所において昭和時代まで盆行事のなかで伝承されていた。ただし、現在も伝承されているのは野だけである〔橋本市史編さん委員会 二〇〇五、大岡 二〇〇八、紀伊山地の霊場と参詣道関連地域伝統文化伝承事業実行委員会 二〇〇九、和歌山県教育委員会 二〇一五〕。

また、和歌山県が『和歌山県の祭り・行事』を発行するためにおこなった「和歌山県祭り・行事基礎調査」では、瀬崎浩孝（元橋本市文化財保護審議会委員長・元橋本市郷土資料館館長）が調査委員として旧橋本市域の祭りや行事を調査し報告している。瀬崎は平成一〇年（一九九八）八月に胡麻生の井向家の精霊迎え・施餓鬼供養を調査している。瀬崎がまとめた「和歌山県祭り・行事基礎調査票」によると、「盆の行事は市内各地各戸で行われていて特色ある行事とは言えないが、井向家では盆だけでなく、一年間の祭りや行事を家族みんなで丁寧に行っているので調査した」と記している。ただし、『和歌山県の祭り・行事』には橋本市域の盆行事については掲載されていない〔和歌山県祭り・行事調査委員会 二〇〇〇〕⁴⁾。

以下、橋本市域における盆行事の概要を、先行研究と筆者の調査をもとにまとめておく。橋本市域の集落には真言宗の寺院が存在している場合が多く、住民は真言宗寺院の檀家が多い。盆行事も細部は集落ごとに異なっているが、基本構造については類似している。古くからの集落で部分的に浄土真宗の檀家も存在するが、今回は調査対象としなかった。新しく移住してきた住民は宗教・宗派も多様であるが、これについても今回は対象としなかった。

2 盆の準備

八月に入ると各家では先祖を迎える準備をする。墓掃除・井戸替え・道の草刈りなどをおこなう。橋本市域では七日を七日盆と呼ぶことが多い。

大正七年の『伊都郡誌』には以下のような記述がある〔和歌山県伊都郡役所 一九一八〕。

七夕の日は井戸換をなし、又一切の仏具を洗う。

大正時代には、旧暦七月に盆行事をおこなっていたため、七夕の日に準備を開始していたことが分かる。

宮本佳典の報告では以下のような記述がある〔宮本 一九六六〕。

八月一日野菜畑に入ると野菜がくさる（菖蒲谷地区）のは、仏が近くにきているからだとする。（中略）（畑）では大掃除がこの時行なわれたと言う。（中略）

大別して墓から仏迎えをする地区と寺から仏迎えをする地区との二つがあり、墓から迎える地区では墓掃除を広範囲に行っている。（中略）盆道づくりにおいて、福相な人に出会うことは、一年間の福をもたらすものである、と言われている（菖蒲谷）（中略）

七日は早朝から家ぐるみの仏具掃除をはじめ、井戸がえをやり、済んだ後は、墓掃除に出かけるのが、各地区で普通に行なわれている。（後略）

『橋本市史 民俗・文化財編』には以下のような記述がある〔橋本市史編さん委員会 二〇〇五〕。

隅田地区では、「道ツクリ」といって墓までの道の草を刈っていたという。七日には「七日盆」といって、墓掃除・井戸替えをして先祖を迎える準備をするという。

筆者の調査では、下兵庫・向副において井戸替えや墓掃除のことが語られた。下兵庫では一日に井戸替えをした。下兵庫の瀬崎浩孝氏は、井戸の底からあの世の人が来てくれると聞いたという。下兵庫では七日に、仏が帰りやすく

するため田の畔の草を刈る。向副では七日盆までに墓掃除に行き、七日に井戸掃除をした。また、向副では七日盆にタナバタサンを祀った。笹に短冊を吊るして、縁側にスイカ・瓜などを供え、川へ流した。最近はしていないという。

3 施餓鬼

盆前に地区の寺院で無縁仏の供養として施餓鬼をおこなう場合がある。『伊都郡誌』には以下のように記されている〔和歌山県伊都郡役所 一九一八〕。

旦那寺にて施餓鬼といふを行ふ。これ法界無縁の亡者の供養をなすものなれども、本郡地方にて行はるるものは広く一般の仏を祀るものにして、新仏（前年の盆以後に死せる者（筆者注…者の後ろに「」が抜けている）ある家には必ず参詣す。

『橋本市史 民俗・文化財編』には以下のような記述があり、向副の施餓鬼棚の写真が掲載されている〔橋本市史編さん委員会 二〇〇五〕。

出塔では、八月五日頃薬師寺で十人衆のうち二人と区長が施餓鬼棚を設け、そうめん・ナスビ（ナス）・果物などを供え読経する。（中略）寺では施餓鬼供養があり、境内の盆棚に三界万霊の経木が供えられたのを持ち帰るところが多い。

橋本市域における施餓鬼の実態を把握するため、向副の観音寺の行事内容について、同地区の松井正芳氏から聞き取りをおこなった。概要を紹介すると、以下のようなものである。『橋本市史 民俗・文化財編』に掲載の施餓鬼棚の写真と同じであることが分かった。

八月五日に観音寺で施餓鬼をする。一三時ごろから準備。一四時ごろから法要。五〇年たつてない先祖の戒名、先祖の霊、三界万霊の経木をもらう。檀徒総代が寄つて、坊さんが来てくれて、寺の本堂で法要をする。終わってから、檀家が寺へ経木をたばりに行く（いただきに行く）。寺の本堂の前に机を置いて、青竹を四・五本切つて、机のぐるりを青竹で囲いして、赤・黄・紫・青の色紙を四隅に吊るして、たばつ

た経木をいったん供えて、ナスビ・洗い米・そうめんの束を細かくくだいたもの三種類を供えて、シキビで水をかけて経木を持ち帰る。

また、高野口町名倉の地蔵寺では八月六日に施餓鬼をおこなっている。地蔵寺で発行している『地蔵寺通信』第四五号（平成二九年七月一日発行）によると、八月六日一九時から二二時に「おせがき法要」をおこなっている。檀家には七月に、この通信が送付されている。「おせがき」を希望する人は、このときに同封されている申し込み用紙に戒名などを記入し、供養料を添えて申し込むことになっている。檀家の方からの話を総合すると、「おせがき」を申し込んだ場合は、六日に地蔵寺へ参拝し、境内の「三界万霊」の石碑前に経木を置き、水向けする。『地蔵寺通信』によると、「経木迎え（仏迎え）」は八月一日から六日となっているが、六日は大変混雑するので、五日までに経木を受け取りに来てほしい、と案内されている。

このように、橋本市域における施餓鬼は、『伊都郡誌』に記載されていたように、無縁仏のみならず先祖供養も兼ねている場合がある。

4 仏迎え

橋本市域での仏迎えとしては、①檀那寺から経木をもらう、②墓参りをする、③高野山まで行く、という三種類がみられた。

『伊都郡誌』には以下のように記されている〔和歌山県伊都郡役所 一九一八〕。

十四日には仏まつりを行ふ。即ち前日寺に至りて、自家の先祖代々の改名（筆者注…戒名のこと）を誌したる経木をたばり来る。これを仏迎ひといふ。

宮本佳典の報告では以下のような記述がある〔宮本 一九六六〕。

仏迎えは前述した如く、墓から行なわれる。シキビの枝に移った仏は家人の手に

よって、家まで運ばれ、門の所で門火をたいて、家の中へ迎えらる。門火については貴重な実例を採集することができた（柱本）。

『高野口町誌 下』には以下のように記されている〔高野口町誌編纂委員会一九六八〕。

あらかじめ檀那寺から祖霊および新仏の戒名などを書いた経木が贈られる。これを精霊の依代として祭る。（中略）十三日に、供花・線香・供物などを持って墓に詣り、仏を迎えて帰り、お茶・御飯・副食物などを供える。十三日の夜、家の外で迎え松明をたく。

『橋本市史 下』にもほぼ同様の記述がみられる〔橋本市史編さん委員会一九七五〕。学文路中学校の『郷土研究』一には以下のような記述がある〔橋本市立学文路中学校 一九七七〕。

八月十三日に迎えたいまつをたく。迎えたいまつは、火をたきながら小さく切ったなすをくべ、しきびの葉で水を三回かけ、心経をくる。

『橋本市史 民俗・文化財編』には以下のような記述がある〔橋本市史編さん委員会 二〇〇五〕。

ムラでは、九日から十三日の間に、寺から経木をもらってることがみられる。学文路・柱本などでは、十日に高野山へ登り、奥の院から経木をもらってくる。この日高野山では「高野山」が開かれていて、盆の花などを買ってきた。高野山に行けない時は慈尊院から経木を持ち帰ったというが、新仏の時は必ず高野山から迎えるという。十日頃坊さんが持つて来るところもある。（中略）

十三日の夕方には、隅田地区・恋野・小田原・柱本・野などのムラでは、庭先で青竹に肥え松とオガラをつけて迎え火を燃やし先祖を迎える。器に水を入れ、経木を盆に乗せ、櫛の枝で経木に器の水をふりかけて拝む。桔梗・女郎花・萩など「盆の花」を竹筒に入れて供え、線香をつける。

筆者の調査でも、仏迎えとして、①檀那寺から経木をもらうことが現在でも広く行われていることを確認した。経木とは、木を薄く削ったものに、先祖などの戒名を記した塔婆の一種である。経木を受け取ることで、仏を迎えると考えられている。先祖代々・新仏・五〇回忌までの仏・弘法大師・無縁仏などの種類がある。橋本市域では、盆前に寺へ経木をもらいに行く、盆前に役員が寺から受け取って檀家に配布する、僧侶が檀家回りのときに経木を持つてくる、という受け取り方がある。日にちは地区によって異なっている。

なお、「施餓鬼」の項目で触れたように、橋本市域では檀那寺でおこなわれる施餓鬼の際に、経木を受け取ってくる場合もある。高野口町大野の大日寺や、同町伏原の普門院でも、施餓鬼の際に経木を受け取ることがある。

一方で、『橋本市史 民俗・文化財編』に記されているような、高野山から経木をもらってくることは、近年では減少しているようである。筆者の調査では、胡麻生の土屋吉子氏（昭和二年生まれ）が以下のように語った。

八月一〇日に高野参りをする。十日参りという。「高野参り、よく参り」という。「よく」というのは、この日に参ると、何十遍参ったことになる。十遍になるのか、百遍になるのか知らんが。先祖を迎えに行く。新仏がなくても行く。それも、のなつた（そうした風習もなくなった）。子どものころに、連れてもらった。高野山の奥の院へ参る。お骨を納めてるから迎えてくる。マキを買ってきた。自分とこへ供えるだけ。マキの苗を買ってきて植えている。色も悪いし、いいマキはできない。十日参りは、大人になってからは、新仏できたときには必ず参った。今も行く人はいない。最近行かない。

このほか、向副の松井正芳氏の家でも仏を迎えに行くために、八月一〇日に高野山へ参り、土産としてコウヤマキを買ってきたという。高野山から買ってくるコウヤマキは、経木と同じように、先祖の依り代としての意味合いがあっ

たようである。

経木を迎えるだけではなく、②墓参りをして先祖を迎えるということも同時におこなっている場合が多い。橋本市域では一日に墓参りをして迎えるところが多いようである。『橋本市史 民俗・文化財編』には、「神野々の七墓では、仏迎えの人々が参るので、その人々を相手とした夜店が出て賑わったという。」と記されている〔橋本市史編さん委員会 二〇〇五〕。一日の夕方であったが、近年では一日の午前中に墓参りをする家も増えているという。

以上のように、仏迎えとしては、①②③が複合しておこなわれているが、近年は③は衰退し、①と②が中心となっているようである。

また、一日の夕方には、庭先で迎え火を焚く家もある。この点について、『橋本市史 民俗・文化財編』には先述のように記され、恋野の迎え火の写真が掲載されている〔橋本市史編さん委員会 二〇〇五〕。

筆者は、平成二八年（二〇一六）八月一日、向副の松井正芳氏の家において、迎え火を拝見した。松井氏の家では、屋敷の入口に、竹と花筒を立てて供え物をしている。ここをカドボトケ（門仏）と呼んでいる。松明を焚くところであるという。見学した際には、一九時ごろから松明を焚いた。早く迎えて、ゆつくり帰ってもらいたい、一日の送りの方は少し遅く松明を焚くという。カドボトケの前に、松明をくくったものを三つ置いて火をつけ、光明真言などを唱えて、ナス・洗い米・生のそうめんを折ったものを火の上に置く。次いで、シキジで水をかける。カドボトケで松明を焚いて拝んだ後、玄関先のガキサンの前で真言を唱える。新棚があるときは新棚でも拝む。最後に、家の中へ入り仏壇の前で真言と般若心経を唱える。仏壇の前で拝み終わった後、正芳氏の妻のカヨ子氏は「よく来てくださいました、どうぞゆつくりしてってください」と仏壇に声をかけていた。

胡麻生の土屋吉子氏、井向正晴氏の家においても、一日の夜に松明を焚く。松井氏の家と同様、屋敷の入口の松明を焚くところ、玄関先の無縁仏、座敷の中の先祖の祭壇で拝んでいるという。

下兵庫の瀬崎氏の家では、家の裏側（北側）に新竹を一本立てている。竹の先へ三本か五本、ろうそくを立て、一日の夕方に火をとます。仏が帰る目印にしているという。瀬崎氏の家の北には水田が広がり、その向こうに墓がある。仏が帰ってくる方向に向けて火を焚いていることになる。

5 先祖の祭祀

祭祀の日程について、宮本佳典の報告では以下のような記述がある〔宮本一九六六〕。

十三、十四日祭られ、十五日朝送られるものと、十四日だけ祭られ、十五日に送られるものと、十三、十四日祭られ、十六日朝送られるもの等色々あるが、十三、十四日祭られ十五日送られるのが、古いものと考えられる。

筆者の調査でも、橋本市域では、一日に迎え、一日に祀り、一日に送る、という形態が一般的であるように思われた。

一日に家に迎えられた先祖は、仏壇・仏壇の前・床の間の前などに設置された先祖の祭壇で祀られる。先祖の祭壇には、一日の夕方から、一日の朝に送り出すまで、さまざまなものが供えられる。『高野口町誌 下』には以下のように記されている〔高野口町誌編纂委員会 一九六八〕。

白瓜・茄子など、細かく切り、蓮または里芋の葉のなかへ入れて供物とする。（中略）十四日は終日お茶を替え、それぞれ朝昼晩と供物をして仏をまつ。供物はほぼどこの家でも、その家の昔からの仕来たりで毎年くりかえされる（朝は南瓜の煮付・お汁、昼は冷素麺〓おからの箸、晩は餡餅〓竹の箸）。

学文路中学校の『郷土研究』一には以下のような記載がある〔橋本市立学文路中学校 一九七七〕。

十三日から朝はごはん、昼はそうめんを供える。そしてご飯と一緒に、みぞはぎ、そうめん、おがら、あんもちには竹箸をそえる。また仏が供えられているものを持って帰りやすいように、「おこ」として長いおがら（芋殻）を供える。

『橋本市史 民俗・文化財編』には以下のように記されている〔橋本市史編さん委員会 二〇〇五〕。

家に迎え入れた先祖を仏壇に祀り、ご飯・汁・南京の煮物・豆などを供える。恋野のある家では、「今晚からゆつくりして下さい」といって供え物をする。（中略）十三日に、コイモの葉にスイカ・ナスなど季節野菜を供えるが、十四日の祭り方は家による違いが大きい。ある家では、朝はご飯・汁、昼はそうめんと漬物、三時はアンコ口餅（餡餅）・大根葉、夜はご飯・七色汁と四回の食事を出す。

筆者の調査でも、家々によって献立はさまざまであった。一三日の夜、一日の朝・昼・三時ごろ・夜、一五日の朝、に食事を替えて出す、という家が多かった。基本的に家族も食べる食事を供えている。一四日の昼から夜にかけて、あんころもちを供える家も多い。向副ではあんころもちのことをドサクサモチと呼んでいる。一四日の夜に供える白い餅は仏の土産であり、オガラのおコ（天秤棒）で担いで帰ってもらう、という語りも多かった。

このような膳以外に、生の野菜も供える。向副の松井氏の家では、仏さんはシンモン（新物）を喜ぶといい、初物を供える。昔は熟していない柿・みかんも供えた。ただし、最近は柿やみかんは摘果するために供えないという。

膳の前には箸を置く。向副の松井氏の家では竹・ミソハギ・オガラを箸を置く。ご飯はミソハギ、そうめんはおガラ、あんころちは竹の箸を使うという。しかし、それぞれの箸を区別せずに一緒に置いている。本数は適当である

という。胡麻生の土屋氏の家でも、竹・ミソハギ・オガラを箸を置く。土屋氏の家では、それぞれの箸を区別して置いている。平野の辻氏の家では新竹で箸を作る。供えるたびに箸を取り替えるので、かつては百何本も箸を作ったという。

檀那寺の僧侶は、檀家を回り、読経をする。檀家が多い寺院では、地区ごとに檀家参りをする日程を決めている。

親戚以外の他家へ先祖の祭壇を拝みに行くことはみられない。ただし、野では、念仏講の人たちが、一四日に村中の家に念仏をあけて回った〔紀伊山地の霊場と参詣道関連地域伝統文化伝承事業実行委員会 二〇〇九〕。

このほか、宮本佳典の報告では以下のような記述がある〔宮本 一九六六〕。両親のそろっている者が、生ける親に盆の間に、魚を贈答し、魚を供する事は広く行なわれているものであるが（中略）（柱本、清水、市脇等）

この点については、今回の筆者の調査では確認できなかった。

6 盆花

盆に先祖などに対して供える花を盆花と呼ぶ。宮本佳典の報告では以下のようない記述がある〔宮本 一九六六〕。

盆花の入手方法は、山村の行商人から買う場合と、村の中で入手する場合と、盆市で買入れる場合の三つが行なわれている。多くの地区は①の方法で入手するが、山辺の村では、村の中でのえられるのが若干あった。（畑）盆市において盆の道具とともに入手されるものとして（野）の盆市が開かれる。これは江戸時代から行なわれているということである。盆花としては、シキビ、キキョウ、アワ、オミナエシ、マキ等がつかわれている。

『高野町誌 下』には、「盆花」として「檜・桔梗・女郎花・萩・みどは

ぎ・山百合」があげられている〔高野口町誌編纂委員会 一九六八〕⁽⁵⁾。『橋本市史 下』には、「盆花（精霊花）」として「ききよう、おみなえし、山ゆり、はぎ等」と記されている〔橋本市史編纂委員会 一九七五〕。学文路中学校の『郷土研究』二には以下のような記載がある〔橋本市立学文路中学校 一九七八〕。

盆を迎える準備としては、まず盆花を整える。精霊花ともいい、キキョウ、オミナエシなどを用意する。

筆者の調査でも、盆花について確認をした。墓・仏壇・新仏・無縁仏ともに同じような花を供えるが、それぞれ少しずつ違う花を供えている家もある。たとえば、無縁仏の花は種類が少ないという家もある。向副の松井氏の家では、ミソハギ・コウヤマキ・シキビ・キクを供えている。キクの代わりにセンニチコウなどを供えることもある。かつては、コウヤマキは近くになかったため、盆の一〇日に高野山へ参ったときに買ってきた。また、筒香（高野町）・宿彦谷あたりから、盆・彼岸や毎月一日・十五日などにおばあさんたちがコウヤマキやシキビを売りに来たという。胡麻生でも、十日参りのときに高野山からコウヤマキを買ってきた。また、高野山のほうから、盆・彼岸などにコウヤマキやシキビを売りに来たという。胡麻生の土屋吉子氏は、「仏さんはシキビに乗って帰ってくる」と語り、盆にはシキビを供えなければいけないという。

盆花を挿す花筒を新竹で作る家もある。『高野口町誌 下』には、「新竹で花筒・線香立・迎え松明用の竹など準備しておく。」と記されている〔高野口町誌編纂委員会 一九六八〕。『橋本市史 下』にもほぼ同様の記述がある〔橋本市史編纂委員会 一九七五〕。橋本市域では、太い竹で花筒、細い竹で線香立を作る、という家も多かった。かつては花筒を毎年作っていたが、今では既製品になっている、という家もある。竹の花筒、線香立は、無縁仏の棚に縛り

付けたり、松明を焚くところで地面かコンクリート製のブロックに立てられる場合が多い。高野町でしばしばみられた、竹筒の先を裂いて足とし、そのまま花筒として立てるモンドリと呼ばれるものはほとんど見られなかった。モンドリに相当する花筒は、伊藤信明が紹介している野の事例以外は確認できなかった〔伊藤 二〇一〇〕。

7 茶湯

仏には茶も供える。これをオチャト（お茶湯）という。仏に供えるお茶は何度も替える。宮本佳典の報告では以下のような記述がある〔宮本 一九六六〕。お茶湯の回数については、多い程よいとするものと、一回、二回行なわれるものと、四十回〜七十回行なわれるものといちじるしく分れている。

学文路中学校の『郷土研究』二には以下のような記述がある〔橋本市立学文路中学校 一九七八〕。

十四日には終日仏様をまつり、お茶とうをする。

『橋本市史 民俗・文化財編』では、四九回、七五回、八〇回など、地域によって回数が異なることが記されている〔橋本市史編纂委員会 二〇〇五〕。筆者の調査でも七五回、一〇五回などと語られた。昔は子どもの仕事であったという。回数は豆で数えた、という家もあった。

8 キュウリの馬・ナスの牛

キュウリ・ナスで馬と牛を作って仏前に供える家もある。ただし、橋本市域に関する文献では確認できない。筆者の調査では、下兵庫の瀬崎氏の家ではキュウリで馬、ナスびで牛を作る。瀬崎氏によると、これは必須であるという。できるだけ早く帰ってきてもらうために馬、できるだけゆっくり帰っても

らうので牛にする。胡麻生の土屋吉子氏は、話には聞いているが、したことはないという。同地区の井向正晴氏によると、恋野ではしている、という。なお、かつらぎ町三谷ではしている家と、していない家があるという。大倉一磨氏の家ではしていなかったが、最近になってするようになったという。それは、大倉氏の妹が橋本市隅田町中島に嫁いでおり、その家では昔からキュウリとナスビの馬と牛をずつとしていると聞いたからであるという。⁽⁶⁾ キュウリの馬とナスの牛は、橋本市全域ではなく、隅田町・恋野でおこなわれていた習俗のように思われる。

9 オハライ・ムセマイリ

橋本市域では、オハライ・ムセマイリという習俗があった。隅田町山内では、昭和四〇年ごろまでおこなわれていたが、現在ではおこなわれていない。オハライ、ムセマイリともに、生家から離家した者が、盆前に生家へ帰る習俗であった。オハライは両親が生きているときにおこなわれ、盆前に生家から離れた人たちを呼び集めてごちそうを食べた。生家に礼に行くといい、両親が長生きするようにと、尾頭付の魚をもらって帰った。両親の一方が亡くなるとムセマイリをおこなうようになる。ムセマイリも、盆前に生家からの連絡で集まる。兄弟・叔父・叔母などが集まった。死んだ親の供養をするといい、参った人たちは仏壇や墓を拝み、その後、食事をした〔森本 二〇〇〇〕。筆者の調査では、胡麻生の土屋吉子氏の家で、吉子氏が子どものころにムセマイリをおこなっていたことを確認した。嫁に行った者が帰ってきて、先祖を祀りに来るものであった。墓へ参り、昼を食べて、日帰りで帰ったという。土屋氏の家では七日であったが、家ごとに日が違ったという。向副の松井正芳氏の家では、大正生まれの母親はよくムセマイリのことを言っていたというが、正芳氏

はどのようなことをしていたのか覚えていないという。

10 新仏の祭祀

去年の盆から当年の盆までに亡くなった死者の霊は、先祖とは区別して新仏として祀られる。先祖とは別に祭壇を作って祀る。宮本佳典の報告では以下のような記述がある〔宮本 一九六六〕。

新仏を親類同族が集まって祭る（畑）のは珍しい行事として注目される。他の地区において、親類は新仏にサトウ、ソウメンなどの供物をするのが多いが、新盆の家はお寺におふせとすることが一部の地区で行なわれている。

一般的には、その家の家族で亡くなった方が祀られるが、橋本市域では、その家で亡くなった家族だけでなく、嫁や婿として家を出た者も祭祀の対象となる場合がある。新仏の祭壇については三章二節で取り上げる。新仏を先祖と別に祀る理由について、高谷重夫は以下のような語りを紹介している〔高谷 一九八八〕。

（筆者注：隅田町芋生・垂井の事例を取り上げたあと）この辺では、屋形を檜葉で囲うことについて、こうしないと仏が恥かしかるからだとい、タナを屋外に設けるのは新仏は一年間ホトケ（先祖の霊）の仲間に入れぬためだという。

筆者の調査では、平野の辻貢氏が「仏さんに入れてもらえないので縁に祀る」と語った。

新仏の棚には、初盆として檀那寺の僧侶、集落の人々や親戚が参る習慣がある。僧侶が参るときは、先祖の祭壇に参るのは別の日程のことが多い。新仏に対する僧侶の参りは先祖よりも少し早い。集落の個人が別々に参る場合と、集落の人々が集団で参る場合がある。『伊都郡誌』には以下のように記されている〔和歌山県伊都郡役所 一九一八〕。

十三日及び十四日の晩には村民相集りて順次にソンジヨダナのある家を廻りて光明真言を唱ふ

『高野口町誌 下』には以下のような記載がある〔高野口町誌編纂委員会一九六八〕。

信太地区の村人たちは、十三、十四日の両日ソンショ棚（尊所棚の意か）新仏を祀る棚）を祀つてある家々を訪れて光明真言を唱えて供養する美風が残っている。

このほか、念仏講などの人が参ることもあった。一三日ごろの夜に、新仏の家に集落の人たちが光明真言を唱えて回るタナマワリ（棚回り）という習慣があり、清水では念仏講の人が新仏の家に六斎念仏を唱えて回ることがあったが〔橋本市史編さん委員会 二〇〇五〕、現在ではおこなわれていない。

家から出た人や親戚を祀る習俗については、高谷重夫と森本一彦が報告している〔高谷一九八八・森本 二〇〇〇〕。高谷・森本は、この習俗をモライマツリといい、橋本市周辺の事例も含めて取り上げて分析している。筆者の調査では、平野の辻氏・胡麻生の土屋氏・向副の松井氏の家において、配偶者の両親などを祀つたことを確認した。ただし、筆者の聞き取りにおいては、モライマツリというような言葉を確認できず、親戚の場合も新仏を祀る、という程度の言い方であった。森本によると、隅田町山内では、親戚の新仏も祀るので、親戚の新仏の棚には参らない、という〔森本 二〇〇〇〕。

11 仏送り

橋本市域では一五日の朝に先祖を送るところが多い。一四日に送り火を焚く家もある。一五日の朝は最後のお供えをしてから仏を送り出す。『伊都郡誌』には以下のように記されている〔和歌山県伊都郡役所 一九一八〕。

十五日の朝は仏送りをなす。此際送り火を焚き光明真言を唱へて後経木を付近の川

に流すなり。此日養父入りをなすこと正月に同じ。

宮本佳典の報告では以下のような記述がある〔宮本 一九六六〕。

十五日送られる地区が多いが（柱本）などでは十六日早朝送られる。大ていは川に流され、山間部の多くも谷に流され（後略）

『高野口町誌 下』には以下のように記されている〔高野口町誌編纂委員会一九六八〕。

十五日の朝、最後の供物をして祀り、その後、経木・供花・供え終わった瓜類・新仏棚などいっさい、川辺へ持参して流してしまふ。このとき送り松明をたいたり灯明・線香をあげて魂送りをする。

『橋本市史 下』でもほぼ同様のことが記述されているが、一五日の朝に光明真言を唱えてから、経木などを川に流して魂送りをする、とある〔橋本市史編さん委員会 一九七五〕。

学文路中学校の『郷土研究』一には以下のような記述がある〔橋本市立学文路中学校 一九七七〕。

十五日 朝紀の川へ経木や飯屋を流しにいく。夜はおくりたいまつをたく。

『橋本市史 民俗・文化財編』では以下のように記されている〔橋本市史編さん委員会 二〇〇五〕。

十五日の朝、先祖の土産といって仏壇に餅を供える。その後、紀ノ川や近くの川の河原で花を立て、ナスビや胡瓜などを供えて経木を立て、線香や蝋燭をつけて心経を唱え、拜んでから経木を流したが、川を汚すとの理由から、今は寺に持っていくところが多い。

野では、十四日の夜十一時頃、念仏講の合図で人々が経木を持って河原に集まり念仏を唱えてから流す。柱本では、経木は川に流したが、夜には庭先に五〇センチほどの竹を割り、縦に三本、横に二本を格子状に立てる。その前に花筒・線香立て・蝋燭

を立てておく。迎え火と同じようなことをする。

野の送りは、現在では山田川の河原で、各家から持ち寄った盆棚などを燃やしている〔大岡 二〇〇八、紀伊山地の霊場と参詣道関連地域伝統文化伝承事業実行委員会 二〇〇九、和歌山県教育委員会 二〇一五〕。

筆者の調査でも、一五日の朝に、紀ノ川や近くの川の河原へ経木・花・供え物を持って行き、拝んでから流した、という家が多かった。ただし、最近では、川を汚すということで、経木は寺へ納める場合が多くなっている。

筆者は、平成二八年（二〇一六）八月一日、胡麻生の井向正晴氏の家において送り火を拝見した。⁷一八時過ぎから家族がそろって仏壇で拝む。般若心経と真言を唱える。次いで、玄関先のガキサンの前で同じように拝む。最後に、屋敷の入口のところで、松明を焚き、立てていた竹に松明を載せる。同じように拝む。迎え火と反対に仏壇、無縁仏、屋敷の入口で拝むことで、仏を送り出す。胡麻生の土屋氏の家や、向副の松井氏の家でも、同じように拝んでいるという。

三 橋本市の盆棚

1 先祖の祭壇

橋本市域では、先祖の霊はホトケサン（仏さん）と呼ぶ場合が一般的である。とくに、無縁仏などと区別する場合には、イエノホトケサン（家の仏さん）と語られる。盆には仏壇周辺に祭壇を設置して先祖の霊を祀る。

宮本佳典の報告では以下のような記述がある〔宮本 一九六六〕。

精霊棚は改めて作ることを行なわれていない。現代では仏壇をもって代用している。

先祖の祭壇については、このほかの文献には記述がない。地元では特筆すべ

きことと認識されていなかったと思われる。

筆者の調査では、先祖の祭壇についても、可能な限り拝見させていただいた。文献と筆者の調査の事例をまとめたものが表1である。筆者の調査によると、橋本市域では、①仏壇が中心の場合、②仏壇を中心にしながら前に置いた机を一体化して祭壇とする場合、③仏壇の周辺に臨時に設置した祭壇を中心にする場合、がみられることが分かった。仏壇の前や周辺に臨時に設置する祭壇としては、机の上に白い布を敷いたものが多い。高野町でみられたような、もろぶたを置く事例はなかった。ただし、高野口町伏原の福井家では、仏壇前に設置した祭壇の上に、もろぶた状の盆を置き、中に野菜などを載せている。

祭祀の対象としては、位牌と経木がある。橋本市域では、位牌は仏壇に並べている家が多い。筆者の調査では、位牌を仏壇から出して臨時の祭壇に並べる家は見当たらなかった。ただし、高谷重夫は隅田町芋生の松本家において、位牌を仏壇から出して祭壇に祀ると報告している〔高谷 一九八八〕。経木については、仏壇に並べる場合と、設置された祭壇に並べる場合がある。経木は専用の台に立て掛ける家もある。

祭壇の背後や周囲には、四国八十八か所、西国三十三か所の掛け軸を掛ける家も多い。

2 新仏の棚

橋本市域では、新仏がある場合、先祖の祭壇とは別に棚を設けて祀る。新仏を祀る習俗は、現在でも市域で広くみられる。ただし、親戚を祀る習俗については、すべての家では確認していない。また、棚の形態については、近年急速に変化してきている。文献と聞き取りによって、新仏の棚の形態を復元したうえで、筆者が拝見した棚について報告する。

大正七年刊行の『伊都郡誌』には以下のように記されている〔和歌山県伊都郡役所 一九一八〕。

新仏は別にソンジヨダナ（尊所棚か又は精霊棚の転か）を造りてまつる。ソンジヨダナとは家の軒に四本の青竹を立て地上より四尺の所に棚を作り、檜葉を以てその四方を葺き、正面に小さき入口を造り、入口には地上より竹梯子を掛くるなり。

昭和七年刊行の『隅田村誌』にもほぼ同じ記述がある〔伊都郡隅田第一尋常高等小学校 一九三二〕。昭和四三年刊行の『高野口町誌 下』には以下のような記述がある〔高野口町誌編纂委員会 一九六八〕。

特に新仏をまつる家では、新竹と檜葉で新仏棚をつくり、竹のヒゴで梯子を拵えてたてかける。

昭和五〇年刊行の『橋本市史 下』には以下のような記述がある〔橋本市史編さん委員会 一九七五〕。

特に新仏のある家では、新竹と檜葉で「新棚」をつくり、竹のひごで梯子をこしらえてたてかけ、家の縁側又は軒先に設ける。

学文路中学校の『郷土研究』一には以下のような記載がある〔橋本市立学文路中学校 一九七七〕⁽⁸⁾。

八月十二日、新仏のある家は水棚をつくる。水棚は真竹の四本柱に棚を組み、松の葉で屋根や壁をおった仮屋を建て、はしごをつける。そしてみぞはぎや、その他の花を供えぶどう、梨、すいかなどを供える。

同中学校の『郷土研究』二にも以下のような記載がある〔橋本市立学文路中学校 一九七八〕。

十三日頃には、盆棚をつくる。これは精霊を迎える祭壇で、特に新仏のある家では、新竹と檜の葉で新棚をつくり、竹のひごで梯子をこしらえてかける。それは家の縁側とか軒先に設けられ、ごはんやそうめんや水などを供える。その他ナスやキュウ

リなどを細かくきざんだものを菓子や果物と共に、ハスや里芋の葉の上にのせて、いっしょに供える。

高谷重夫は隅田町芋生の事例として二例取り上げている。二例ともに親戚を祀ったキヤクダナであるが、少なくともそのうちの二軒についてはその家の新仏の棚と同じであるという。いずれの事例も、縁側に台を置き、台の上の屋形を檜葉で覆った形態となっている。高谷は、新仏の棚の形態について、「この辺では、屋形を檜葉で囲うことについて、こうしないと仏が恥かしがるからだ」と云い、タナを屋外に設けるのは新仏は一年間ホトケ（先祖の霊）の仲間に入れためだという。」と、報告している〔高谷 一九八八〕。

森本一彦は、橋本市史民俗部会の調査によるとして、隅田町山内の事例を紹介している〔森本 二〇〇〇〕。

シンボトケの棚はさまざまな状態があるが、ソウメンなどの箱に新竹で型を作り、ヒノキで飾って、新竹のハシゴをかける。

『橋本市史 民俗・文化財編』は以下のように紹介し、出塔の新仏の棚の写真を掲載している〔橋本市史編さん委員会 二〇〇五〕。

新仏の家では、縁側に軒先に新竹と檜の葉で「ソンジヨ棚」と呼ぶ精霊棚を別につくる。竹ひごの長い梯子を檜の葉で囲まれた経木を入れた高い棚にかける。

以上のように、橋本市域における新仏の棚は、さまざまな文献で取り上げられてきた。新仏の棚についての名称は、ソンジヨダナ〔和歌山県伊都郡役所 一九一八、橋本市史編さん委員会 二〇〇五〕、親戚を祀る棚については、キヤクダナなどと呼ぶという〔高谷 一九八八〕。ただし、筆者の調査では、ソンジヨダナという呼び方は確認できなかった。とくに名前はないという方が最も多く、胡麻生の土屋氏・向副の松井氏はアラタナと語る。キヤクダナという呼び方は、高野口町大野の井浦氏から聞いた。後述するように、新仏の祭祀

が変化するとともに、名称も忘れられつつあると考えられる。

新仏の棚の形態は、新竹を組んで檜葉で覆ったもので、軒先が縁側に設置する、というのが昭和時代までは一般的であったと思われる。似たような形態の棚は、高野町・紀の川市などにも分布している〔藤井 二〇〇一・二〇一九〕。ただし、高野町や紀の川市に比べると、橋本市域での新仏の棚は、文献と筆者の調査を総合すると、軒先よりも縁側に設置する場合が多いように思われる。

また、新仏の棚の形態は、近年大きく変化している。向副の松井氏から聞いた形態の変化をまとめておく。もともとは、青竹（新竹）四本を柱にして棚を作り、周囲をヒバ（檜葉）で囲った。前にはしごをかける。竹とひも代わりの葛（くず）の皮（豆カズラ）とヒバで作る。アラタナは高いほどいいといい、天井につくように高く作る。新棚は親戚や近所に手伝ってもらって作るものであるという。新棚に経木を入れる。松井氏の家では、二〇年ほど前まで、縁側の床から、天井まで届く高い棚を作っていた。しかし、近年ではコンテナなどをひっくり返して台にし、その上に棚を作るようになった。さらに、最近では葬儀屋が用意する棚を設ける家がほとんどとなっている。そして、アラタナは座敷へ祀る家が増えてきたという。葬儀屋が熱心に注文を取りに来るようになったため、葬儀屋に発注する家が増えたという。また、アラタナを作ると、親戚や近所に手伝いに来てもらう必要があるため、周囲に遠慮して葬儀屋に注文するようになったという。すべての家で、棚の形態の変化を確認していないが、さまざまな語りと、文献の記述から、他の家でもほぼ同様の変化をたどったと推測される。

平成二八年（二〇一六）八月、向副の大上正記氏の家で、檜葉で覆っている新仏の棚を拝見することができた。大上氏は、父がこうした棚を作っていたのを見ていて、その父が亡くなったので自分で作ったという。コンテナを台にし

ているが、棚の本体部分には新竹と檜葉で作っている。横に花筒をつけている。本来は反対側に線香立もつけるが、檜葉は燃えやすいのでつけなかったという。近年は葬儀屋から買った棚を祀る家がほとんどであるため、僧侶が檀家参りに来たとき、この棚を見て驚いていたという。

胡麻生の土屋氏の家でも、もともとは向副の松井氏の家と同じような棚を作っていた。アラタナと呼んでいる。新棚は一人で作ってはいけないといい、血のひいた者が手伝わないといけないという。平成二年に新仏を祀ったときは、縁側に檜葉の棚を作った。平成二八年八月、土屋氏の家では、吉子氏の息子の妻の母を新仏として祀っていた。本来は、家族と同じ棚を作って祀るという。家で亡くなった人がいると、葬儀屋が注文を取りに来るが、外の親戚の場合には来ないという。葬儀屋では注文した分だけしか作っていないというので、簡単に家で棚を作ったという。息子の妻によると、実家の母親を祀るため、遠慮する気持ちがあるといい、座敷ではなく、縁側で祀ることになったという。

以上を総合すると、橋本市域では新仏の棚は以下のように変化したと思われる。①軒先・縁側に竹を組んで檜葉で覆う棚を設置（自家製） ↓ ②軒先・縁側にコンテナなどを台にして祭壇とする（自家製） ↓ ③座敷に既製品の祭壇を設置（業者から購入）、というものである。平成初期ごろ（一九九〇年代）から、葬儀屋の棚の普及と、近所などへの遠慮などによって、急速に簡略化したようである。現在ではほとんどが③になっている。先述した、向副の大上家、胡麻生の土屋家の棚は②であり、現在では珍しいものといえる。

3 無縁仏の棚

新仏の棚に対して、毎年、縁側などに設けるのが無縁仏の棚である。三界万霊の経木を置き、花を立て、供え物をする場合が多い。橋本市域では、多くの

家で無縁仏の棚を祀っているようである。新仏の棚ほどではないが文献にもわずかに記載がある。『隅田村誌』には、新仏のソンジョダナの説明のあとに、以下のように記されている〔伊都郡隅田第一尋常高等小学校 一九三二〕。

別に檜笠・蓑等を用ひて法界無縁の亡者の霊を祀る、俗に「餓鬼棚」と呼ぶ。

「別に」という表現から、新仏の棚とは別に無縁仏を祀る棚を設けている、ということが分かる。『隅田村誌』における盆の内容は、先述したように、大正七年刊行の『伊都郡誌』とほぼ同じ内容となっている。しかし、「餓鬼棚」の記述は『伊都郡誌』には見られない。昭和七年刊行の『隅田村誌』編纂の際に、隅田村に特徴的な習俗として新たに追記されたと思われる⁹⁾。

昭和四一年の宮本佳典の報告では以下のような記述がある〔宮本 一九六六〕。

餓鬼棚は軒先で祭られるもので、たらいとみのを使ったものである。

昭和四三年刊行の『高野口町誌 下』には以下のような記述がある〔高野口町誌編纂委員会 一九六八〕。

別に桶など伏せてテシマ・莫座などでかこい、これを縄で桶に縛りつけ、その上に麦藁帽子か、檜笠などを被せて餓鬼棚を作り、勝手口などの外側に設ける。

昭和五〇年刊行の『橋本市史 下』には以下のように記されている〔橋本市史編さん委員会 一九七五〕。

またこれ（筆者注…新仏の棚）とは別に無縁仏のための「餓鬼棚」を軒下の隅にこしらえる風習も残されている。

学文路中学校の『郷土研究』二にも、『橋本市史 下』とほぼ同じ記載がある〔橋本市立学文路中学校 一九七八〕。

『和歌山県の民俗分布図』には、「ガキダナを作る」の事例として、橋本市賢堂・高野口町応其・高野口町大野に記載がある〔和歌山県教育委員会 一九七

九〕。高谷重夫は、昭和六一年（一九八六）の盆に、隅田町芋生において、無縁仏の棚を見ている。このときの高谷は新仏（とくにキヤクダナ）を中心に調査しているため、無縁仏の棚については、直前に紹介している和歌山県かつらぎ町のものと同様であるとして、詳細な記述はしていない〔高谷 一九八八〕。ただし、その後ままとめた「盆棚の形態による分類」図において、橋本市隅田の無縁仏の棚のスケッチを紹介している〔高谷 一九九五〕。〔高谷 一九八八〕のかつらぎ町の事例、および〔高谷 一九九五〕のスケッチをもとにすると、桶を伏せてその上に供物をし、桶の上部をござなどで巻いて、麦藁帽子などをかぶせた棚であると思われる。そのうえで、以下のような語りについても紹介している〔高谷 一九八八〕。

ホウカイサン・サンガイサン・ガキサン等と呼ばれるタナは隅田では、ほとんどの家でも見られる。芋生の一老人の話では、ガキダナサンは、家のホトケの帰る時、荷物を担いでお伴をする役だそうである。

森本一彦は、橋本市史民俗部会の調査によるとして、隅田町山内の事例を紹介している〔森本 二〇〇〇〕。

ガキさん（無縁仏）の棚は軒下などの雨がかるところに祀られる。ガキさんの棚は、コンテナに青竹を横からアーチ型に曲げ、後から横の竹に青竹をくくり付ける。その上にカップ（昔は蓑）をかけ、上に麦ワラをのせる。

平成一七年刊行の『橋本市史 民俗・文化財編』には以下のような記述があり、出塔の棚の写真を掲載している。写真の棚は、桶の上に経木・供え物を置き、すだれで覆い、上には帽子をかぶせ、桶に花筒をくくりつけている。この前には食事を供えている〔橋本市史編さん委員会 二〇〇五〕。

家の外には「餓鬼さん」という無縁仏の棚をつくる。餓鬼棚は檜笠と蓑でつくる小さな棚であつたが、今では莫座を巻いている。北・南宿では、餓鬼のことを「スミホ

トケ」と呼んでいる。

このほか、伊藤信明は、彦谷と野の棚の写真を紹介している〔伊藤 二〇一〇〕。彦谷の棚は、『橋本市史 民俗・文化財編』の出塔の形態とほぼ同じであるが、野の棚は箕の上に経木や供え物を置く形態である。

以上のように、橋本市域における無縁仏の棚に関する文献は多数存在する。しかし、形態の種類や、地域ごとの差についてはまとめられたものはない。表1をもとにしながら、筆者の調査によって明らかになったことをまとめておく。

名称としては、ガキサン・ムエンサン・サンガイサン・サンカイサン・ホウカイサンなどと呼ばれる。ホウカイサンという呼び方は高野口町方面に多い。祀る場所は、軒下・玄関先・縁側・廊下・玄関・座敷となっている。大きくいえば、軒下・玄関先と玄関に分かれる。玄関での祭祀は高野口町方面に多い。無縁仏はイエノホトケサンとは区別して祀られている。平野の辻氏の家では、仏壇に供えたものは家族でいただくが、ガキサンに供えたものは、同じものであるが食べないという。一方、胡麻生の土屋氏の家では、ガキサンに供えたものを盗んで食べたら夏やせしない、という。ただし、よその家まで盗みに行くことはなかったという。

棚の形態は、大きく分けると、①台を置いて蓑・ござ・すだれで覆い帽子をかぶせて祀る、②箕・段ボールを立てて中に祀る、③箕・盆・机の上に祀る、という三種類が確認できた。このうち橋本市において広く分布しているのは①の形態である。高谷重夫が報告しているスケッチとほぼ同じ形態といえる〔高谷 一九九五〕。家によって多少の違いがあるが、より古い形は、台は桶を用い、テシマ（蓑）で覆うものと思われる。『隅田村誌』では檜笠と蓑で作る、とある〔伊都郡隅田第一尋常高等小学校 一九三二〕。テシマとは農作業の際

に雨が降ると着たものであり、蓑のことである。向副の松井氏の家では、テシマで覆っていたが、今はテシマがないのでござをかぶせるという。向副の大山氏の家では、ござで覆っていたが、今はすだれで覆っているという。おそらく、昭和初期には、桶を台にし、テシマで覆った形態が多かったのではないと思われる。その後、台にはコンテナが用いられるようになり、覆うものにはござ・すだれなども用いられるようになったと考えられる。農家にとって身近にあるものを用いて祀っているようである。

②の形態は、高野口町伏原の福井家・田中家、高野口町向島の山本家で確認した。福井氏・山本氏の語りから、①の変化形と思われる。今回の調査では、高野口町のみで確認した。しかし、③は必ずしも①からの変化と考えることは難しい。高野口町名倉の寺田家の場合、すだれなどの衝立を立てているため、無縁仏の棚を隠そうとする意識が働いており、①に類似した形態といえる。寺田家以外の③事例は、語りとしても、何かで隠そうとする意識は認められない。また、③の場合は、高野口町と野に分布している。このように、橋本市域における無縁仏の棚の形態には地域差が認められる。

四 橋本市の盆棚の分類

橋本市の盆棚について、先祖・新仏・無縁仏、および松明を焚くところも含めて祭祀場所ごとに分類したものが表2である。ここでは、昨年まとめた高野町の事例と比較しながら、橋本市の盆棚の特徴を考察する。

墓地・寺院での迎え行事については、語りのみで確認したため、情報が得られなかった。したがって、高野町のような、墓地・寺院において高燈籠を立てる、柿・サトイモなどの葉に供え物をする、というような行為がまったくないとは断定できない。

橋本市の盆棚の特徴としては、屋敷の入り口の迎え火・送り火を焚くところが祭祀場所となっている事例が多いという点がある。高野町でも松明を焚くところに竹を立てる事例があった。それに対して、橋本市の場合は、竹を立てて松明を焚くだけでなく、その場所に花を立てたり、供え物を置くなど、祭祀場所となっている点が異なっている。向副の松井氏の家では、この場所をカドボトケと呼んでいる。高野口町大野の稲岡氏の家では、サンガイサン・ホウカイサンと区別してガキサンと呼んでいる。これに対して、高野町にみられたような、縁側の外に置く「仏の橋」のようなものはまったく確認できなかった。

松明を焚くところを祭祀場所とする家では、同じ家で三か所、ないしは四か所で祀ることになる。例年は、松明を焚くところ、無縁仏の棚、先祖の祭壇の三か所である。新仏がある場合は、これに新仏の棚を加えて四か所で棚（祭壇）を設けることになる。新仏の棚は毎年設けるものではないが、橋本市では先述のように親戚の新仏がある場合でも棚を設置するため、新仏を含めて四か所に棚（祭壇）を設置する年もまれではなく、ときおりあるということになる。実際に、土屋氏の家では筆者が調査した平成二八年（二〇一六）には四か所で祀っていた。

向副の松井氏、胡麻生の土屋氏・井向氏の家を迎え火や送り火を拝見すると、仏が家に入入りする入り口であり出口であるようである。迎え火の際には、最初に松明を焚き、松明を焚くところ・無縁仏・新仏・先祖の順で拝む。送り火の際には、先祖・新仏・無縁仏・松明を焚くところ、の順で拝んで、最後に送り火を焚く。ホトケが家にやってくる通り道が明確に意識されていることが分かる。

松明を焚くところが祭祀場所となっているのは、旧橋本市域に広がっている。高野口町では稲岡家のみで確認できた。稲岡家の場合、良氏の実家（橋

本市南馬場）と同じように祀っているという。したがって、旧橋本市域を中心に分布する習俗と考えられる。

無縁仏の棚については、軒下・玄関先・縁側・廊下・玄関・座敷に設置される。高野町と異なるのは、庭に祀られる事例がないという点である。橋本市の場合は、庭の祭祀場所は松明を焚くところとなり、無縁仏はより家側に祀られるという特徴がある。

また、高野町に比べると無縁仏の棚の形態は種類が少ない。先述したように、①台を置いて蓑・ござ・すだれで覆い帽子をかぶせて祀る、②箕・段ボールを立てて中に祀る、③箕・盆・机の上に祀る、という三種類が確認できた。このうち①の形態は、旧橋本市域のほうが濃密に分布しているようである。これに対して、高野口町地域ではまばらに分布している。高野口町大野の稲岡家は語りから判断すると橋本式であり、同様に同町向島の坂口家は九度山式と思われる。九度山町の盆棚については次の機会にまとめる予定であるが、①の形態は九度山町の平野部地域にも広がっているようである。なお、①の形態は高野町の富貴の棚と類似している。ただし、橋本市の事例は帽子をかぶせているという点が異なっている。また、富貴の場合は、無縁仏の棚を縁側に向けて設置し、縁側に供え物を置いている。橋本市の場合は、無縁仏の棚は独立した存在となっている。縁側に供え物を置くのは高野口町伏原の福井家のみであった。

棚の形態の差については、先述したように、②は①が簡素化したものと考えられる。しかし、③については単純に①が簡素化したものと断定はできない。①と③の形態の差は、ひとつは農家・非農家の違いによると考えられる。農家は農業で使用している農具を用いて祀ってきたと語られる。それに対し、非農家は農具を持っていないため、その家にあるもの（箱・コンテナ・段ボールな

ど）を用いて祀る、ということになる。また、農家は庭が広く、タナを設置する場所に困らないが、非農家は家の外で祀る場所が限られる。したがって、玄関や土間などで簡素に祀る、ということも考えられる。¹⁰⁾①と③のどちらがより古い形態であるのか、という点については現時点では根拠を示した説明はできない。ただ、高野町などを含めた周辺の棚の形態と比較すると、①は洗練された形態であることができる。松明を焚くところの祭祀、キュウリ・ナスの牛馬の事例などを合わせて、大胆な仮説を立てれば、①は橋本市隅田町付近で発生し、周辺地域（奈良県五條市西部・和歌山県高野町富貴・同県橋本市高野口町・同県九度山町平野部・同県かつらぎ町東部）へと広まっていた、比較的新しい形態ではないかと考えることができる。いづごろ発生し、広まったのかについてはもう少し事例を集めないと分からない。ただ、①の形態は昭和初期の文献で確認できるため、江戸末期ごろから大正時代までの間に発生していたのではないかと推測している。

一方で新仏の棚の形態については、橋本市特有の特徴は少ない。先述したように、①軒先・縁側に竹を組んで檜葉で覆う棚を設置（自家製）↓②軒先・縁側にコンテナなどを台にして祭壇とする（自家製）↓③座敷に既製品の祭壇を設置（業者から購入）、という変化については、周辺地域とほぼ同様である。ただ、橋本市域の平野部は、地域の山間部や高野町などに比べると、③に移行する時期がやや早かったと思われる。橋本市域における新仏の棚の特徴は、周辺地域に比べると、軒下よりも縁側に設置していた、という事例が多い点であろうか。これは、高野町における無縁仏の祭祀場所の変化などを考慮すると、昔は軒下に棚を作っていたものが、昭和時代になると縁側に移行していた、とも考えられる。

また、橋本市域における新仏の棚の特徴としては、親戚の新仏も祀る、とい

う点がある。当該の家で新仏が出る場合は、数十年に一度という程度であるが、親戚の新仏も祀る場合も含めれば、一〇数年に一度程度で新仏を祀る可能性がある。新仏を祀る頻度が、他地域よりも高いことになる。たとえば、高野口町上中の赤井氏の家では、廊下の隅の棚をガキサン、縁側の棚をサンガイサンと呼んで区別し、サンガイサンの方はこの家から出た人を祀っている、と語られる。この場合の縁側のサンガイサンとは、新仏祭祀が常態化したものと考えられる。

最後に先祖の祭壇について検討しておく。橋本市域では、高野町に比べると、仏壇そのものを祭壇とする家が多いように思われる。高野町の場合は、仏壇の前ではなく、床の間や床の間と仏壇の間に、先祖の祭壇を設置している家も多かった。しかし、橋本市域の場合は、仏壇の前に机を置いて祭壇とする家が多い。また、位牌は基本的に仏壇に並べ、祭壇に出している家はなかった。ただし、経木は仏壇に置く家ばかりでなく、仏壇前の祭壇に並べる家もあった。

また、高野町にみられたように、もろぶたを置いて、中に経木や野菜を置く、という形態は見られなかった。筆者の調査の範囲では、高野口伏原の福井家のみ、もろぶた状の盆に野菜などを載せていることを確認した。また、橋本市学文路でも、もろぶたの上に祀るということを聞いた（表1の26）。高野町の事例で推定したように、もろぶたを置いて祀る形態は、より古い習俗のように思われる。筆者の調査では紀の川市粉河などでも、もろぶたで祀っている家があることを確認したため、山間部だけの習俗ということでもないと思われる。したがって、橋本市域では、もろぶたでの祭祀が早い段階でなくなった可能性があると指摘しておく。

おわりに

以上を総合すると、橋本市域における盆棚は、比較的新しい時代に、整えられ、洗練されていき、それが周辺地域にまで広まっていた、と捉えることが可能である。紀ノ川が流れ、高野街道・大和街道が通り、人々の往来が多かった地域であるため、遠方の習俗や知識を取り入れて改良した可能性もある。

一方で、橋本市域に限ると、盆棚に関する紀伊藩領と高野領の差は明確ではない。しかし、旧橋本市域と高野口町では差がある。これは、盆行事以外にも含めた地域的な差異も関連していると思われる。農家と非農家の違いなど、生業の差異も影響しているようである。平野部と山間部という地理的な影響については明確には分からなかった。この点は、次にまとめる予定の九度山町において検討してみたい。九度山町は高野山北麓に位置し、山間部から平野部まで町域が広がっているからである。

現在も盆行事調査は継続している。今後も九度山町・かつらぎ町・紀美野町・紀の川市・有田川町などを順番に取り上げ、とくに盆棚の形態について分析していく予定である。

(注)

- (1) 清水の場合は聞き取りのみで、盆行事は拝見できていない。
- (2) 旧橋本市では森本一彦氏より紹介いただいた瀬崎浩孝氏（元橋本市文化財保護審議会委員長・元橋本市郷土資料館館長）によっておこなった調査先を手配いただいた。胡麻生の土屋氏は同地区の井向氏の紹介であった。旧高野の小林家は、調査の際に宿泊したことで調査させていただいた。旧高野口町では瀬崎浩孝氏より紹介いただいた池田和夫氏（高野口文化財研究會会長・高野七口再生保存會会長）によっておこなった調査先を手配した。

だった。上中の赤井氏は瀬崎浩孝氏の紹介であった。なお、平成十一年（一九九九）に聞き取りをした井浦氏は中野榮治氏（元近畿大学教授・歴史地理学）の紹介で、森田氏は井浦氏の紹介であった。平成十一年の調査時は、盆棚を意識して調査する以前の段階であったため、無縁仏については確認できていない。なお、表1の16の事例は平成二十八年（二〇一六）近畿大学文学部文化・歴史学科藤井ゼミ卒業生の菅原綾乃氏が在学中に聞き取りをし、情報提供いただいたものである。

- (3) 一章の内容については、以下の文献を参考に、現地調査によって得られた情報を総合してまとめた『角川日本地名大辞典』編纂委員会 一九八五、紀の川水の歴史街道編纂委員会 一九九六、小池 一九八六、高野口町誌編纂委員会 一九六八、水稻文化研究所・紀ノ川流域研究会 二〇〇五、橋本市史編さん委員会 一九七五、橋本市史編さん委員会 二〇〇五、藤本・山陰 二〇〇三、和歌山県教育庁文化財課 二〇〇〇、和歌山県教育庁文化財課 二〇〇三。

- (4) 瀬崎氏がまとめて橋本市教育委員会に提出した「和歌山県祭り・行事基礎調査票」の写しは、瀬崎氏から提供いただいて拝見した。

- (5) 和歌山県では、一般的に「ぞ」を「ど」と発音する場合が多い。したがって、「みどはぎ」は「みぞはぎ」と呼ばれるものと同じである。ミソハギのことと思われる。

- (6) かつらぎ町三谷の大倉一磨氏の家では、平成二十八年（二〇一六）八月一三日に盆の調査を実施した。キュウリの馬・ナスビの牛に関する語りは、一磨氏の妻の妙子氏よりうかがった。

- (7) 筆者が井向正晴氏・なお氏夫妻から聞き取りをしたところでは、夫妻は奈良県十津川村の出身であり、ダム建設にともない、昭和三十三年ごろ、

現在の場所に家族とともに移住してきた、ということであった。十津川村では神道であったが、移住後、母親が亡くなったことをきっかけに寺の檀家になったという。なお氏は近所の土屋吉子氏から盆の祀り方などを教えてもらったという。したがって、井向家の盆行事は十津川の習俗ではなく、胡麻生の土屋家の習俗を受け継いでいるといえよう。井向家は盆に限らず、夫妻を中心に家族そろって年中行事をおこなっているようであった。

(8) 学文路中学校の『郷土研究』一には「水棚」という名称が記されているが、他の文献や筆者の聞き取り調査を総合すると、これは橋本市域では一般的に用いられていたものではないと思われる。この報告を書いた生徒は『日本の民俗 和歌山』(野田 一九七四)を参考に読み上げて、祖母に語ってもらった、と記している。『日本の民俗 和歌山』には御坊市の水棚の写真が掲載されているため、そちらの名称に引き寄せて書かれたものと推測される。

(9) 『伊都郡誌』の編纂は、大正六年(一九一七)に、恋野尋常高等小学校長の西中武吉と渋田尋常高等小学校訓導の高瀬敏彦に委嘱されている。執筆分担については記されていない。ただし、『伊都郡誌』の年中行事部分の記述は、見好村の事例が多く取り上げられていることから、渋田尋常高等小学校の高瀬敏彦がこの部分を執筆した可能性が高いと思われる。渋田は当時の見好村であり、現在のかつらぎ町に当たる。恋野は伊都郡の東端、渋田は西端に位置するため、盆に限らず習俗が異なる可能性がある。昭和七年(一九三二)に『隅田村誌』を編纂する際、『伊都郡誌』を引用しながら、隅田村に特徴的な部分として、「餓鬼棚」を追記したと思われる。なお、反対に『伊都郡誌』に記述があった施餓鬼

に関する部分は、『隅田村誌』には見られない。

(10) 小林氏は奈良県野迫川村の出身であるため、野迫川の祀り方を踏襲している可能性もある。

(参考文献)

- 伊藤信明 二〇一〇 「先祖を祭る」『和歌山県立文書館だより』二八
伊都郡隅田第一尋常高等小学校編 一九三二 『隅田村誌』 伊都郡隅田第一尋常高等小学校
大岡康之 一九九四 「お盆について」『橋本歴史研究会報』四二
大岡康之 二〇〇八 「橋本市野の仏送りの行事」『橋本歴史研究会報』二二七
『角川日本地名大辞典』編纂委員会編 一九八五 『角川日本地名大辞典 和歌山県』 角川書店
紀伊山地の霊場と参詣道関連地域伝統文化伝承事業実行委員会編 二〇〇九 『高野山麓の六斎念仏』 紀伊山地の霊場と参詣道関連地域伝統文化伝承事業実行委員会
紀の川水の歴史街道編纂委員会編 一九九六 『紀の川 ―水の歴史街道―』 建設省近畿地方建設局和歌山工事事務所
小池洋一編 一九八六 『和歌山県の地理』 地人書房
高野口町誌編纂委員会編 一九六八 『高野口町誌 下』 高野口町教育委員会
高野町史編纂委員会編 二〇一二 『高野町史 民俗編』 高野町
水稻文化研究所・紀ノ川流域研究会編 二〇〇五 『紀伊国相賀荘地域総合調査』 一二世紀COEプログラム アジア地域文化エンハンシング研究センター 水稻文化研究所
高谷重夫 一九八五 「餓鬼の棚」『日本民俗学』一五七・一五八(高谷重夫)

- 一九九五 『盆行事の民俗学的研究』 岩田書院 収録)
- 高谷重夫 一九八八 「もらいまつり―盆行事の一問題―」 『日本民俗学』 一七四 (高谷重夫 一九九五 『盆行事の民俗学的研究』 岩田書院 収録)
- 高谷重夫 一九八九 「無縁仏の問題」 『近畿民俗』 一一八・一一九
- 高谷重夫 一九九四 「盆と施餓鬼」 『あしな』 二二・七
- 高谷重夫 一九九五 『盆行事の民俗学的研究』 岩田書院
- 中野榮治 一九九一 『流域の歴史地理 紀ノ川』 古今書院
- 野田三郎 一九七四 『日本の民俗 三〇 和歌山』 第一法規出版
- 橋本市史編さん委員会編 一九七五 『橋本市史 下』 橋本市
- 橋本市史編さん委員会編 二〇〇五 『橋本市史 民俗編・文化財編』 橋本市
- 橋本市立学文路中学校編 一九七七 『学文路 郷土研究の記録』 一 橋本市立学文路中学校
- 橋本市立学文路中学校編 一九七八 『学文路 郷土研究の記録』 二 橋本市立学文路中学校
- 日野西真定 一九九八 「高野山の民俗 (二十三)」 『高野山時報』 平成一〇年六月一日
- 藤井弘章 二〇〇一 「瀬淵の年中行事」 『和歌山県立博物館研究紀要』 七
- 藤井弘章 二〇一七 「高野山納骨習俗の地域差 ―和歌山県北部を中心に―」 『民俗文化』 二一九
- 藤井弘章 二〇一九 「和歌山県高野町の盆棚」 『民俗文化』 三二
- 藤本清二郎・山陰加春夫編 二〇〇三 『街道の日本史 三五 和歌山・高野山と紀ノ川』 吉川弘文館
- 松本保千代 一九七九 「和歌山県の葬送・墓制」 堀哲・井阪康二・橋本鉄男・岩井宏美・星田公一・松本保千代・原泰根 『近畿の葬送・墓制』 明玄書

房

- 宮本佳典 一九六六 「郷土の盆行事民俗の採集」 『文化橋本』 二
- 森本一彦 二〇〇〇 「双系制親族論に関する再検討―モライマツリ・トウマイリを中心として」 『国際日本研究』 創刊号 (森本一彦 二〇〇六 『先祖祭祀と家の確立―「半檀家」から一家一寺へ―』 ミネルヴァ書房 収録)
- 和歌山県伊都郡役所編 一九一八 『和歌山県伊都郡誌』 和歌山県伊都郡役所
- 和歌山県教育委員会編 一九七九 『和歌山県民俗分布図 民俗文化財緊急分布調査報告書』 和歌山県教育委員会 (兵庫県教育委員会・大阪府教育委員会・和歌山県教育委員会編 一九九九 『都道府県別日本の民俗分布地図集成 九 近畿地方の民俗地図 二 兵庫・大阪・和歌山』 東洋書林 収録)
- 和歌山県教育委員会編 二〇一五 『高野山周辺地域民俗文化財調査報告書』 和歌山県教育委員会
- 和歌山県教育庁文化財課編 二〇〇〇 『紀の川流域荘園群細分布調査概要報告書 I 紀伊国隅田荘現況調査』 和歌山県教育委員会
- 和歌山県教育庁文化財課編 二〇〇三 『紀の川流域荘園群細分布調査概要報告書 II 官省符荘現況調査 高野樹をつくらせた荘園 ―もうひとつの力タカナ書き百姓申状の世界―』 和歌山県教育委員会
- 和歌山県祭り・行事調査委員会編 二〇〇〇 『和歌山県の祭り・行事』 和歌山県教育委員会
- (付記)
- 平成二八年(二〇一六)七月・八月の旧橋本市での調査、平成二九年(二〇一七)八月の旧高野口町での調査は、いずれも近畿大学民俗学研究所の調査として実施した。瀬崎浩孝氏・池田和夫氏には複数の調査先の手配をいただいた

た。心より感謝申し上げたい。中野榮治氏・森本一彦氏・伊藤信明氏には、さまざまな情報提供をいただいた。森本氏には、橋本市域における調査の一部についても同行いただいた。文中に名前を挙げた話者以外にも、橋本市域では多くの方にお世話になった。すべての方々にあらためて御礼申し上げたい。

なお、注記した以外の写真は筆者撮影のものである。

表 1 橋本市の盆棚事例

番号	地名	話者（生年）	祭祀対象	祭祀場所	棚の名称	棚の形態と祀り方	話者の説明	写真	盆の概要	調査年月日 出典
1	橋本市平野	辻貢 (昭和 11年)	先祖	仏壇	ホトケサン	仏壇の仏像の前に位牌（先祖代々）と経木（先祖代々）を置く。その他の位牌は仏像の横に置いている。先祖の位牌と経木の前に盆を置き、料理・箸を敷いて野菜・果物を載せる。供え物の両側に花筒（2、花瓶）・ろうそく立を置く。仏壇の前に机（常設）を置き、茶（9）・線香立・鉾などを置く。（調査時の料理はご飯（12）とナンキン（12）。花はコウヤマキ・ケイトウ・菊など。）	8月13日、お迎えしたあとオチャットする。夜はナンキンとご飯を供える。オチャットは75回する。子どもの仕事だった。ソラメを75個入れて、1つずつ移して敷えた。オチャットのお茶は縁側の下に置いたバケツに溜める。お盆が終わったら、四つ辻に捨てる。箸は供えらたぎに替えた。100何本とこしらえた。新竹でこしらえる。 14日の朝は白いご飯とナス・アブラザラの味噌汁。新竹で作った箸を供える。昼はそうめん。シイタケ・カンピョウでだしを取る。そうめんのときは、竹で作った箸だとすべるのでオカラの箸を供える。3時以降にあんこもちとモミナ（キエウリ）。夜は七色の和え物。味噌であえる。醤油の家もある。ナス・サトイモ・ゴボウ・アブラザラ・ミョウガ・カキマメ・カンピョウ。カキマメは臭い豆。それをしてたら盆やと思う。盆にしかない。この豆は嫌う。ササゲご飯もする。奥さんはササゲを作らないし、色も薄いので、小豆ご飯にしている。夕ご飯を食べたら、餅とそうめん。オガラをつける。オガラをオコにして、担いで帰る。帰りの土産。玄關のろうそくのところまで拜んで終わり。 15日の朝はオチャットをして送り出す。仏壇に供えたものはうちでいただく。	28	真言宗。平野の時光寺には住職はいない。山内の寿福寺から坊さんに来てもらう。 8月8日に時光寺で施餓鬼をする。20年ぐらい前、貢氏が区長をしているときに施餓鬼を始めた。本堂の供え物は以下のようなもの。3つの三宝に大根・ニンジン・炊いた飯・高野豆腐（カンピョウでくくる）・ナス（カンピョウでくくる）を載せる。どんぶりに入れた大盛り飯7つ、どんぶりに入れたお茶7つ。3つのもろふたに、野菜・果物・そうめんなどを持ち寄って載せる。本堂前では、たらきに経木を並べ、経木の上にナンキンを置く。炊いていない米と炊いた米を経木の上に入れ、その上にお茶を掛ける。 13日に墓へホトケを迎えに行く。昔は夕方であったが、今は午前中に行く。墓石ごとにコイモの葉にお供えを置く。墓へ行ったらあと、時光寺の墓へも行く。寺の墓はこの村に最初に住み着いた人の墓という。 14日に家で祀る。 15日の朝に送る。以前は落合川へ流した。今は畑のきれいなところへ持って行く。 16日、寺で盆踊りをする。	2016年8月 4日・13日
			新仏	縁側		コノテナを台にして、経木（三界万霊）・野菜（芋の葉を敷く）などを置く。全体をござで覆う。ござの上に帽子をかぶせ、花筒（1、竹）・線香立（1、竹）をくくりつける。前にもコノテナを置き、上に料理・茶・箸・ろうそく立・鉾などを置く。（調査時の料理・花は先祖と同じ。）	よう祀ってもらわん人が来てるので祀るらしい。上にかぶせる帽子はふだんかぶらない。専用に置いている。ござもガキサン用と書いておいてある。花筒は新竹を切ってきて作る。昔は墓用の花筒などを含めて10以上作った。今は寺・家の門のところ・ガキサンの花筒の3本を作っている。線香立は細い竹。ガキサンの供え物は先祖と同じものだけと食べない。	29		
			無縁仏	縁の下	ガキサン					

				門を入ったところ (迎え松明)	門を入ったところに、枝の付いた細長い竹を立て、枝にろうそくをつける。下に花筒(1、竹)・線香立(1、竹)を立てる。その前にコンクリートのプラッタを置き、上に盆を置く。盆の上に大きな葉を敷き、野菜・果物を載せる。ここで迎え火を焚く。 (調査時の花は先祖と同じ。)		昭和60年の盆に、主婦の妹の夫と、主人の叔母の2人の初盆のタナをまつた。これをキヤクダナという。縁側に台を置き、上に紙箱を檜葉で飾った屋形を載せ、割竹のはしごを掛けた。 桶を伏せて台にし、ござなどで巻いて、上部を縛り、上に麦藁帽子をかぶせる。中に経木(三界万霊)を置く。 仏壇の前に台を置き、位牌を出し、寺から受けてきた塔婆(位牌の数だけある)を並べる。正面には大日如来の画像を掛け、両脇に2本の笹竹を立て、これに縄(チヌメという草をなつたもの)を渡し、それに粟の穂・ホウズキ・芋の葉・青豆を掛けている。このような飾りはこのあたりでは珍しく、隅田ではもう1軒、山本という家で見られるだけという。 13日の夕刻はご飯・ナンキンの葉、14日の朝はササゲ汁、昼はそうめん、3時はあんころ餅、夜は七色の和え物、15日の朝は白餅にオカラの棒を添える。オカラの棒をオウコ(担い棒)にして、仏は供物を担いで帰るといふ。供え物は客棚・仏壇・サンガイとともに同じ。	30		
2	橋本市隅田町芋生	隅田駅前の家	新仏 縁側			隅田町芋生の真言宗東光寺の檀家。この寺が無住のため隅田八幡宮近くの高能寺から、8月7日に経木谷(1988)を受けてきた。迎え火は8月13日の夕刻に焚き、15日の朝送る。	1986年(高谷1988)			
			無縁仏 表の戸口	ムエンサン、ホウカイサンともいう						
3	橋本市隅田町芋生	松本	先祖 仏壇の前			ホトケを迎えるのは13日の夕刻。	1986年(高谷1988)			
			新仏 縁側の上手			主婦の里の親と主人の弟(他家へ養子)の2人の初棚がまつられている。高い台を白布で覆い、その上に檜葉で飾った屋形を載せたタナが縁側の上手に作られている。屋形の内部は2つに区切られ、それぞれの塔婆が収められ、下には2個の膳を置き、飯の菜の碗が3個ずつ供えられている。別に屋形の中にも木の葉にナスなどが手向けられ、横には菅竹の花筒にコウヤブキなどが挿してある。はしごは2本掛けられている。				
			無縁仏 門口の軒下	サンガイサン、カキサン		家の初盆のタナは、すべてにわたって客棚と同じ。				

				庭		(無縁仏の棚とは別に) 庭に青竹を1本立て、その下には花を供える。迎え火・送り火の小さな松明をこの竹に結び付けて焚いた名残。今は必ずしも炊かないという。			
4	橋本市下兵庫	瀬崎浩孝 (昭和11年)	先祖	仏壇の前	ホトケサン	仏壇の両側に四国88所などの掛け軸を掛け、仏壇の前に経木 (先祖代々など)・塔婆 (先祖代々など) を置く。その前に位牌を並べる。仏壇の前に机を置き、白いクロスをかけて祭壇にする。料理 (5)・茶 (5)・花筒 (2)・花瓶)・ろうそく立・線香立・鉦などを置く。横に盆を置き、大きな葉を敷いて野菜を載せる。横に果物・他家からの供え物を置く。 (調査時の料理はそうめん。花はコウヤマキ・ホウズキ・菊など。)	14日は、ごちそうして、拜むと同時に共食する。ホトケサンのごちそうと同じものをいただく。3食いただいてもらて、15日の朝、最後のごちそうをさしてもらうて、向こうの世界に帰ってもらう。キュウリで馬、ナスで牛を作る。これは必須。できるだけ早く帰ってきてもらうために馬、できるだけゆっくり帰ってもらうので牛にする。今でもする。キュウリの馬は13日、ナスの牛は15日に供える。一緒に置かない。	31	真言宗。利生護国寺の檀家。 8月1日に井戸督え。井戸の水をかすってしまふ。井戸の底からあの世の人が来てくれるという。 7日に墓掃除。田んぼの畔の草などを刈り、仏が帰るやすいようにする。 経木は利生護国寺から役員が持つてくる。 13日に迎え火を焚く。14日に家 で祀る。15日に送る。以前は紀ノ川へ流した。今は経木だけ寺へ持って行く。供え物は市が回収する。百姓は畑へ持って行って、土地に返す。 盆踊りで有名なのは富貴 (高野町)。富貴の盆踊りによく行った。8月いっぱい、あちこちで踊った、
			無縁仏	勝手口の外	ガキサン	桶を台にして、経木 (三界万霊)・料理・お茶・箸などを置き、すたれで覆い、上に帽子をかぶせる。前に花筒・ろうそく立・線香立を置く。 (調査時の料理は先祖と同じ。花はシキミと色花。)		32	
				屋敷の隅		屋敷の北西の隅に枝の付いた細長い竹を立てる。下に花筒・ろうそく立・線香立を置く。家の北側に墓がある。先祖が墓から帰ってくるといふことで、屋敷の隅の竹を立てるところは門と考えている。門のところの名前は無い。入ったところに井戸がある。 (調査時の花はガキサンと同じ。)		33	
			新仏			新盆は、箱をして、ヒバでふちを囲って、階段をした。			
5	橋本市下兵庫	鈴木啓之 (昭和12年)	無縁仏	縁の下	ガキサン	コンテナを台にして、経木 (三界万霊)・野菜 (芋の葉を敷く)などを置き、ござで覆い、上に帽子をかぶせる。横に花筒 (1、既製品)・線香立 (1、竹) をくくりつける。 (調査時の花はコウヤマキ・ホウズキと色花。)	門を入ったところに、枝の付いた細長い竹を立てる。下にろうそく立・線香立 (1、竹) を立てる。ここで迎え火・送り火を焚く。	34	2016年8月14日
				屋敷の入り口				35	

					13日の晩。お茶を供える。ナンキン炊いて、ご飯を供える。14日。朝はご飯と漬物。昼はそうめん。3時ごろのおやつはあんころもち。夜は7色のオツイサン。汁もん。あんをつけない白い餅をお膳に1つずつ置く。夕飯に土産としてつける。オコでいいのでいんでもらわんなので（天秤棒で担いで帰ってかわらないといけないので）。オガラ太いのものはオコ、細いものは箸にする。箸は竹・オカラ・ミソハギで作る。オチャトは75回する。お茶を替える。今は半分程度の回数しかしない。キュウリとナスの牛馬はここではしていない。話は聞いているけど、したことはない。盆に、仏さんはシキビに乗って帰ってくるという。シキビは供えないといけない。	36・37	真言宗。胡麻生の寺は大師寺。インダさんはいない。 8月13日まで小峰寺（境内）のインダさんが檀家参りをする。そのときに経木をおいていく。先祖代々と三界の2枚くれる。新仏はインダさんが参る日が違う。 10日に高野山へ参った。「十日参り」という。先祖を迎えてくるという。 昔からの家はムセ参りがあった。嫁に行った者が帰ってきて、先祖をまつりに来る。墓へ参る。1軒1軒で日が違う。子どものじぶんにあった。 13日に墓参りをし、迎え火を焚く。13日の夜から供える。 14日に家で祀り、夜に送り火を焚く。 15日に送る。以前は川へ流した。今は家で燃やす。 盆踊り。今年は11日。八幡さんでする。	
6	橋本市胡麻生 和2年）	土屋吉子（昭和2年）	先祖 仏壇の前	イエノホトケ サン	仏壇の位牌の前に経木（先祖代々）・過去帳を置く。その前にご飯・お茶・花筒（2、花瓶）などを置く。仏壇の前に机（常設）を置き、ろうそく立・線香立・鉾などを置く。机の前に盆を2つ置き、料理（2、合計4）・茶（2、合計4）・箸をおく。横に盆を置き、野菜を載せる。 （調査時の料理はあんころもちとおひたし。箸は左の膳にミソハギ、右の膳に竹。花はコウヤマキ・ホウスキ・菊。シキビは見当たらなかった。）	新仏 軒下→廊下	38	廊下に台を置いて2段にし、白い布を掛けて祭壇にする。上段に経木（新仏）を置き、横に大きな葉を敷いて野菜などを置く。ろうそく立・線香立なども置く。下段には野菜を置く。祭壇の前に膳を置き、料理・茶・箸を置く。祭壇の横にはオガラを立て掛ける。横に花筒（1、花瓶）を置く。 （調査時の料理は先祖と同じ。花はコウヤマキ・ミソハギ・ホウスキ。）
			無縁仏 玄関先	ガキサン、サンガイサンという	桶を台にして、経木（三界万霊）・野菜・ろうそく立などを置き、ござで覆い、上に帽子をかぶせる。花筒（1、竹）・線香立（1、竹）をくくりつける。前に椅子を置き、料理・茶・箸などを載せる。 （調査時の料理は先祖と同じ。花はコウヤマキ・ホウスキ。）		39・40	外に祀るのはガキサンという。サンガイサンともいう。入口へ置く。昔から変わっていない。毎年している。桶をひっくり返して、底を利用して、供える。壁はござでも、すだれでもええ。上には帽子を着せる。14日の3時にあんころもちを供える。盗んで食べたら夏やせせーへんという。自分とこだけで、ほかの家には行かない。子どもがだまって食べた。

						屋敷の入り口	屋敷の入口に、枝の付いた細長い竹を立てる。横に花筒（1、竹）・オカラの枝・ろうそく立・線香立（1、竹）などを立てる。地面に大きな葉を敷き、野菜などを載せる。横にスイカを置く。ここで迎え火・送り火を焚く。（調査の年は、迎えも送りも拝むだけで、火は焚かなかった、という。）	竹は枝が3段になるものを立てる。松明を枝にくくって焚いた。迎えるのは早い時間にし、送るのは遅い時間にする。迎えるときは、外から中を向いて拝む。入ってくれないように。迎え火のところ、サンガイサン、先祖と3とこ（3か所）で拝む。迎え火のところはとくに名前はない。心経くって拝む。迎えるのは早く迎えて、送るのは遅く送る。14日の晩に送り火を焚く。中から外に向いて拝む。送り出すように拝む。先祖、サンガイサン、送り火のこの3とこで拝む。	41		
			先祖	仏壇			仏壇に位牌を並べ、経木（先祖代々）を置く。前に盆を置き、野菜を載せる。その前に膳（2）を置き、両側に花筒（2）を置く。仏壇の前に机（常設）を置いて、ろうそく立・線香立・鉦などを置く。（調査時の膳はご飯・汁物・スイカなど。茶を入れて5品。横にあんころもち（2）を置く。花はコウヤマキ・ホウズキ・菊。）	正晴氏・なお氏ともに奈良県十津川村の出身。ダムができたため橋本市に引っ越してきた、もとは神道であったが、こちらにきて寺に入った。行事ごとなどは近所の土屋吉子氏に教えてもらった。十津川では盆は簡単だった。	23		
7	橋本市胡麻生 お（昭和11年）	井向正晴（昭和7年）・なお（昭和11年）	無縁仏	玄関先	ガキサン、サンガイサン		桶を台にして、経木（三界万霊）を置く。盆を置いて野菜などを載せる。すだれで覆い、上に帽子をかぶせる。花筒（1、竹）・線香立（1、竹）をくくりつける。前に机を置き、料理・茶・ろうそく立などを載せる。（調査時の膳は先祖と同じ。あんころもちも同じ。花も先祖と同じ。）		24・42	8月14日の夜に松明を焚いて送る。	2016年8月5日・14日
						屋敷の入り口	屋敷の入口に、枝の付いた細長い竹を立てる。その前にコンクリートのフロックを置き、穴の部分に花筒（1、竹）・線香立（1、竹）・オカラの枝を立てる。ここで迎え火・送り火を焚く。（調査時の花は先祖と同じ。送りの際には、先祖代々・三界万霊の経木と、鉦・ろうそくを盆に載せて、フロックの前に置き、拝んでいた。）		25・26		
8	橋本市野		無縁仏	玄関？			箕の上に、野菜・果物・花筒（竹）などを置き、前に線香立（竹）・鉦などを置く。				伊藤 2010

9	橋本市野	小林房代	無縁仏	玄閑	サンガイサン、ガキサンともいう	玄閑の台の上に、経木（三界万霊）を立て掛け、盆を置く。盆の上に野菜・果物・茶・花筒・ろうそく立・線香立・鉦を置く。	草の上にコイモの葉を置いて、お供えしているだけのところもある。外にちよんと置いていたところのこともある。ござを巻いているのは見たところがある。紙の箱を置いていたところもある。母は外に置くのを嫌がった。犬とか猫とかにさわられるのがいやだから。	43	奉命寺の檀家。 8月10日に寺へ経木を買いに行く。 12日にお寺さんがお参りに来る。前の日（11日）から祀る。14日にご飯を供える。15日の朝早く、川へ流した。流したらだめということになり、24日に寺で燃やしている。以前は紀ノ川へ流しに行っていた。15日の朝早く、最後のお茶をしてから片付ける。母も自分も北股（奈良県野迫川村）の生まれ。	2016年8月5日・14日
10	橋本市出塔		新仏	縁側の隅か？		竹を立てて、檜葉などで囲った棚を作る。長いはしごを掛ける。棚の下に机を置き、供え物・花筒（竹）などを置く。両側に灯籠を置く。			橋本市史編さん委員会 2005	
11	橋本市出塔		無縁仏	縁側か？		桶を台にして、経木・野菜などを置き、すだれで覆い、上に帽子をかぶせる。花筒をくくりつける。前に台を置き、料理などを載せる。			橋本市史編さん委員会 2005	
12	橋本市彦谷		無縁仏	軒下		木の箱を台にして供え物などを置き、ござで覆う。上には帽子をかぶせる。その前には、椅子を置いて、膳を載せる。			伊藤 2010	

2016年7月 1日・8月4 日・13日	向副の寺は観音寺。昔は住職がいた。亡くなってから、賢堂の定福寺の坊さんが盆に参ってくれる。8月5日に観音寺で施餓鬼をする。七日盆までに墓掃除に行く。花立用の新竹を採ってぐる。13日に墓へ迎えに行くときに花立を新しくする。	8月7日。七日盆。昔は月遅れのタナバタサンを祀った。子どものころは、笹に短冊を吊るして、ヌイカとか瓜とか供えた。最近はあるまりしてない。七夕も流した。棚をした記憶はない。笹に短冊を吊るして、縁側に同じように、ヌイカ・ナスビ・白瓜・キュウリなどを丸まませた。	8月7日に井戸掃除をした。ボツブだった。最近はしていない。	10日に高野山へ参る。	13日の朝から墓へ迎えに行く。ハスの葉がないので、サトイモの葉に、トマト・キュウリ・ナスなどを薄く輪切りにして、石碑のある数だけごちそうを作って持つて行く。初めて採れた野菜を持って行った。ホウズキもほかの野菜と一緒にサトイモの葉の上に載せた。提灯になぞらえていると思う。最近あまり持つて行かない。イノシシ・シカが下りてきて食べに来るので。	13日の夕方、迎え火を焚く。	14日の夕方、送り火を焚く。	15日の朝、紀ノ川へ流した。新棚も流した。	19・45	新棚という。青竹（新竹）を4本切ってきて、柱にして、棚を作った。ぐるりをヒバで囲って、はしごを竹で編んだ。屋根は開いていと思う。底とぐるりはヒバで覆う。縁側の床から建てる。縁側の天井まで届く。竹とひも代わりの蔓（くず）の皮（豆カスラ）とヒバで作る。豆カズラで縛る。新棚に経木を入れる。3年前、母親の新盆をした。8月2・3日から参ってくれた。家で作った。親戚や近所が手伝った。自分たちだけでは作らない。最近は段ボールの上にする。今は葬儀屋が注文を取りにくる。楯皮かたにかで屋根を作る。今は、家でするのは少ないと思う。カヨ子氏の実家は粉河（紀の川市）。正芳氏も棚を作るのを手伝ったことがある。粉河でも同じような棚をしていた。濃い身内が亡くなったときにも棚を作る。カヨ子氏の両親が亡くなったときにも松家で棚をした。息子の嫁さんの母が亡くなったときにも棚をした。このときは、コンテナをうつむけて、ぐるりに柱を立てた。ぐるりはヒバで囲った。新竹を使う。最近ではお参りに行っても、ほとんど座敷に配っている。	桶をうつむけて、テシマをかぶせて、むきわら帽子をかぶせる。今はテシマがないのでゴサをかぶせる。花筒と親香立をに入れる。桶はトオテ。1斗入る。親類を入れる。桶にお供えをするのに机を前に出す。以前は箱などの低いものを使っていた。食事をお供えするのに机を出す。今の机はちょうどいいので使っている。	カキサンは外。新仏は雨縁。	新棚という。青竹（新竹）を4本切ってきて、柱にして、棚を作った。ぐるりをヒバで囲って、はしごを竹で編んだ。屋根は開いていと思う。底とぐるりはヒバで覆う。縁側の床から建てる。縁側の天井まで届く。竹とひも代わりの蔓（くず）の皮（豆カスラ）とヒバで作る。豆カズラで縛る。新棚に経木を入れる。3年前、母親の新盆をした。8月2・3日から参ってくれた。家で作った。親戚や近所が手伝った。自分たちだけでは作らない。最近は段ボールの上にする。今は葬儀屋が注文を取りにくる。楯皮かたにかで屋根を作る。今は、家でするのは少ないと思う。カヨ子氏の実家は粉河（紀の川市）。正芳氏も棚を作るのを手伝ったことがある。粉河でも同じような棚をしていた。濃い身内が亡くなったときにも棚を作る。カヨ子氏の両親が亡くなったときにも松家で棚をした。息子の嫁さんの母が亡くなったときにも棚をした。このときは、コンテナをうつむけて、ぐるりに柱を立てた。ぐるりはヒバで囲った。新竹を使う。最近ではお参りに行っても、ほとんど座敷に配っている。	桶を台にして、経木（三界万霊）・野菜（芋の葉を敷く）などを置き、ござ（以前はテシマ）で覆い、上に帽子をかぶせ、横に花筒（1、竹）・親香立（1、竹）をくりつける。ナスビを台にしてろうそくを立てる。前に机を出し、料理・茶・箸を置く。 （調査時の送りの料理はご飯・ナス・オミナエシ・ホウズキ・菊。カキサンの桶は高さ32cm。全体の高さは約97cm。）	ガキサン（カヨ子氏はホウカイサンという）	玄関先	無縁仏	新仏	縁側	新仏	松井正芳（昭和11年）・カヨ子	橋本市向副	13
----------------------------	--	--	-------------------------------	-------------	---	----------------	----------------	-----------------------	-------	---	---	---------------	---	---	----------------------	-----	-----	----	----	----	-----------------	-------	----

[illegible]

			先祖	仏壇				真言宗。永楽寺の檀家。経木はお寺さんへもらいに行く。檀家は300ほどあるので、日にちをずらして、2日ほどで配る。8月10日か11日に行く。お仏壇の先祖代々と無縁仏の2枚もらう。お坊さんが拜みに来てくれる。10日ぐらいいから参ってくれるので、10日ぐらいいから祀る。最後は供えたものは腐ってくる。父の代にシツタク（分家）。本家でも同じようなことをしていた。キュウリやナスなどの牛馬は見たことがない。昔は迎え火を焚いた。今は焚かない。蕨だけ燃やす。何も立てない。結核がはやっていたとき、棒にナスを挿して、ナスを食べたら結核になれへん（ならない）といった。15日に送る。昔は紀ノ川へ流した。午前中に流した。盆に、女の人が鈴みたいなのを持って拜んでくれる。チンチンさん。新仏がないときでも1軒1軒回った。昔は、一番鉦、二番鉦を突く鉦を持って、東の端と西の端から歌いながら1軒1軒回ったという。男ばかり。お医者さんをやっていた旧家で合流して、ごちそう出した。松永氏は記憶がない。清水のおばあさんが言っていた。この人も歌は覚えていないという。		
15	橋本市清水	松永定治（昭和12年）	新仏				新仏は昔から棚はしない。		2016年7月1日	
			無縁仏	玄関	ムエンボトケ		玄関に無縁仏を祀る。無縁仏という。ごさを巻く。			
			先祖	仏壇	ホトケサン		供え物はお茶・そうめん・ご飯など。そのときどきにより、とくに何を供えるか決まっていらない。お茶は何回も取り替える。皿に載せた豆を別の皿に移して回数を数える。			
16	橋本市清水	武田弘（昭和9年）・ヒデ子（昭和13年）（調査時は他府県在住）	新仏				正面に穴を開けた長方形の木の箱の周りにヒノキの葉をつける。4本の青竹で足を作り、その箱を立てる。正面の穴の部分に青竹ではしごを作り、立て掛ける。木の箱の空洞部分にお茶や果物などの供え物を置く。		8月13日。ホトケサンを迎える。14日は1日オチャトする。15日にホトケサンを送る。小さいころには、近所の谷川にナス・キュウリ果物などの供え物を流した。	
			無縁仏	軒先	サンガイサン		1斗樽にごさを巻き付け、上部を結ぶ。その中へ供え物を入れ、経木（三界）を立てる。		2015年8月、菅原綾乃氏の聞き取り	

信太地区全体が地藏寺（橋本市高野口町名倉）の檀家。真言宗の山科派になる。8月に入ってから自治会の当番が経木と旗を配ってくる。旗は仏壇に貼る。8月6日に寺で施餓鬼がある。6日に寺へ行くとき、水向けする経木をくれる。信太の人でも行く人もいる。名倉では、50年たっていない人の経木を地藏さんにお供えして水を掛ける。名倉でも盆に祀る経木は先にもらっている。6日にもう経木は寺に置いてくる。	50	11日の夜からお供えをする。迎えてきたときはオカイサンを供える。これは白粥。それとナスビのアサツケ。暑い中、帰ってきたから供える。12日。(朝のお供えは撮影。)昼はそうめんとナンキンを炊いたりした。屋からのおやつにあんころもち。夜はご飯。炊き込みご飯をするところもある。家によって違う。赤井氏の家では、白いご飯とおかずと餅。子どもはオチャヤトをした。1時間に1回ぐらいお茶を入れ替えた。子どもたちも忙しいので、奥さんが替えた。今は朝屋晩の間に替えるだけ。おばあちゃんがいいたころはあんころもちを作った。今は買ってくる。女性は1日中、台所に立ちっばなしだった。お餅をついて、夜にお土産にしていた。今はパンとかケーキとか、孫たちが食べられるようなものをしていく。あくる日の朝、送る。	先祖	仏壇の前	位牌は仏壇に並べる。仏壇の前に机を置き、白い布を掛けて祭壇にする。経木（先祖代々・弘法大師）を仏壇に立てかける。経木の前に盆を置き、大きな葉を敷いて野菜・果物・薯などを載せる。机の上にはほかに花筒（2）、ろうそく立・線香立などを置く。机の前には膳（3）・鉢を置き、横には菓子などを置く。 (調査時の膳はご飯・煮物・ずいき・茶。ご飯・煮物・茶は各膳に2つで合計6つ、ずいきは各膳に1つで合計3つ。花はコウヤマキ・ホウズキと色花。)	新仏	軒下→家の中	橋本市高野口町上中	赤井正憲 (昭和23年)	17
信太地区全体が地藏寺（橋本市高野口町名倉）の檀家。真言宗の山科派になる。8月に入ってから自治会の当番が経木と旗を配ってくる。旗は仏壇に貼る。8月6日に寺で施餓鬼がある。6日に寺へ行くとき、水向けする経木をくれる。名倉では、50年たっていない人の経木を地藏さんにお供えして水を掛ける。名倉でも盆に祀る経木は先にもらっている。6日にもう経木は寺に置いてくる。	51	サンガイサンはどこでもやっている。「三界」の経木を置いて1斗枿の上に祀る。正憲氏が子どものころにはござで囲っていた。上を縛っていた。奥さんが嫁にきたころには米の袋を巻いていた。奥さんはござの記憶はない。米の袋は短いから上をくくれない。今は紙で巻いている。奥さんの実家は農家ではないので1斗枿はない。草々と帰ってこれない人だから、隠れて食べるように隠していると聞いた。サンガイサンに家なしという。昔から廊下の隅で祀る。隠れて食へる。この家から出た人を祀る。奥さんの実家（名倉）では、台所の端にサンガイサン、入口の近くにガキ棚をしていた。送るときは、籠に入れて、サンガイサンもガキサンも持って行った。今は燃えるもんだけ持って行く。	(この家から出た廊下の隅人)	サンガイサン	1斗枿の上に経木（三界万霊）・野菜などを載せ、紙で囲う。前に膳（1）を置き、料理を供える。1斗枿の両側に花筒（1）・菓子・ろうそく立・線香立などを置く。 (調査時の膳は先祖の祭壇と同じ。花はヒサカキと色花。)	新仏	軒下→家の中	橋本市高野口町上中	赤井正憲 (昭和23年)	17

2017年8月12日

			無縁仏	納屋の土間の窓の近く→廊下の隅の窓の下	ガキサン	木の椅子に置いていた。→葬式のときの白木の机を台にして、膳・野菜・果物・菓子などを置く。 (調査時の膳は先祖の祭壇と同じ。)	ガキ棚は納屋の隅にしていた。リファーム前は土間にあった。納屋の土間の窓の近くに祀っていた。夜のうちにこっそり食べに来てもらう。昔から中にしている。外ではしていない。昔は木の椅子に置いていた。椅子を2つ置いて、1つにはお膳を載せていた。今は葬式のときの白木の机に置いていて。今年はリファームしているのでやめとこうかと思っただけど、悪いことがあったらいけないので祀った。ガキサンは無縁さん。放浪もの。虫でもなんでも。行き場所のない者。奥さんは嫁に来たところからガキ棚はしていた。正憲氏の祖母がしていた。近所ではサンカイサンは祀っているが、ガキサンは祀っていない家も多い。	52			
		先祖	仏壇の前				先祖は仏壇の前で祀る。オチャトは朝昼晩する。親戚が来たらオチャトする。			真言宗。地蔵寺の檀家。地蔵寺には7月末から8月6日までに行く。寺へ1年間のお参りしてもらう代金を支払いに行く。そのときに申し込んで経木をもらってくる。施餓鬼しますか、と聞かれる。します、という番号札をもらう。6日に施餓鬼。施餓鬼用の経木をいただく。三界さんという石がある。そこに経木を立てて、水を掛けてお祈りする。	2017年8月5日・12日
18	橋本市高野口町名倉	池田和夫	新仏				新仏は棚を作った。家内の父が亡くなったとき、信太(橋本市高野口町)の親戚が材料を持ってきて、作ったのを見た。一緒に竹を削って作ったことがある。20数年前。お寺さんに行って、ホウカイサンの経木もいただいてくる。家の入口あたりへ祀る。道中を案内していただく。ご先祖さんを連れて来ていただく。家々で祀る。ホウカイサンはみようみまねでしている。				
			無縁仏	家の入口	ホウカイサン						
						仏壇の前に机を置き、経木(先祖代々・50回忌までの仏・弘法大師)を専用の台に立てる。机にはおはぎ・団子・野菜・果物・花筒(2)・ジュース類・酒などを置く。前に小机(常設)を置き、ろうそく立・線香立・鉦などを置く。横にはスイカ・他家からの供え物などを置く。 (調査時の花はコウヤキと色花など。)	9日におまつりした。昔から同じ。仏壇の横に祀っている。妙寺(かつらぎ町)ではござで巻いているのを見た。上がり小口で祀っている。	53		寺は地蔵寺。封書で盆の祀り方などを送ってくる。混むから、8月4日に迎えた。9日に参ってもらった。名倉はお参りの日を選べる。坊さんに9日に来てもらったら、食事は片づける。14日まではお供えはする。15日に送る。	
19	橋本市高野口町名倉	橋本圭司の母	先祖	仏壇の前						2017年8月12日	
			無縁仏	仏壇の横(床の間の前)	サンカイサン、ホウカイサンともいう	机の上に白い布を敷き、その上に経木(三界万霊)・おはぎ・団子・果物・水・ジュース類・酒・花筒(1)などを置く。 (調査時の花は先祖の祭壇と同じ。)					

20	橋本市高野口町名倉	寺田晴美	無縁仏	居間	サンガイサン	机の上に白い布を敷き、その上に経木（三界万霊）・料理・茶・箸・野菜・果物・菓子・花筒（1）・ろうそく立・線香立などを置く。サンガイサンの祭壇の横（仏壇の方向）に衝立を置く。（調査時の料理は2品。花はコウヤヤキ・菊。）	遠慮するので、衝立をしている。庭があるところは庭に祀る。玄関に祀る家もある。携帯に去年の写真を保存している。忘れてしまうので撮っている。去年はすだれの衝立をしていた。今年も簡単なものを立てている。去年まで、経木はナスビに切り込みを入れて立てていた。サンガイサンだけ。仏壇の前に立てる経木は、立てかけられるものがある。今年もナスビではなく、カード立てがあったので、そこに経木を立てている。	54	2017年8月12日
21	橋本市高野口町名倉	三島英雄	先祖	仏壇	仏壇に位牌を並べる。仏壇の前に机を置き、専用の台に経木を並べる。机には料理・野菜・花筒・ろうそく立などを置く。仏壇と机の間に塔婆を立てる。仏壇の横に四国88所の掛け軸を掛ける。仏壇の横の床の間にも、四国88所、西国33所の掛け軸を掛ける。壺の上に盆を置き、経木（三界万霊）を立てる。盆の上に、野菜・茶・花筒（1、花瓶）を載せる。		盆には蓮の葉の上にスイカ・マツカ・ナシ・モモ・サツマイモなどを供える。蓮の葉は芳弘氏の母親の実家（奈良県五條市）から持ってきてくれる。この辺りにはない。蓮の葉がないときは里芋（タイモ、コイモともいう）の葉の上に置く。初盆のタナは縁側に作る。ぐるりをヒバで囲んで中へ経木を置いて祀る。親戚に手伝ってもらって作ったが、今はたいてい買ってくる。	55	2017年8月（三島英雄氏撮影、池田和夫氏提供写真による）
			無縁仏						
22	橋本市高野口町大野	森田初雪（明治42年）・芳弘（昭和33年）	先祖	縁側		12日に経木をもらってくる。その晩にゆっくりしてよといっておチャッキモチ（アンコロモチ）を供える。13日の朝はナンキン・ご飯、昼はそうめん、夜はかやくご飯、アイニ（間に）寿司やお茶を供える。ミヤゲモチとして白餅とアンコロモチを供える。13日の供え物は家によって違う。14日の朝はイモオカイ（芋お粥）を炊いて、オチャットして寺へ送る。オガラはミヤゲモチにつけて箸とおコにする。盆にはミソハギ・キキョウ・オミナエシなどの七色の花を供えた。今は菊などを供える。盆と彼岸にはマキとシキビを自転車の後ろに積んだり、女の人が背負ってくる。横に束ねて背負ってくる。花坂（高野町）の人で決まった人がくる。		1999年10月10日	
23	橋本市高野口町大野	井浦輝作（昭和4年）	先祖			8月12日に寺へ経木をもらいに行つて迎える。14日の朝、経木を寺へ持って行く。まとめて高野へ持って行ってもらう。オガラなどは小田井に流した。迎え火、送り火などは昔からしない。最近8月23日にろうそく祭りをするようになった。1本200円のろうそくを買ってもらって無縁さん、地蔵さんと自分の墓へろうそくを供えてもらう。今年で8年目。		1999年10月10日	

			新仏	縁側		新仏のタナは縁側に作る。11日ごろから作り、タナマイリをする。嫁さんに行った人や嫁ぎ先の親などのためにキヤクタナ（客棚）を作っていたが、15年ほど前から近所に気を遣わすからということをやめるようになった。こっそりと今もしているところもある。タナは紀ノ川（オオカワ）へもって行って流したが、今は墓で焼く。		
24	橋本市高野口 町大野	田中清喬	先祖	仏壇の前	仏壇に位牌を並べる。仏壇の前に机を置き、白い布をかけて祭壇にする。机には経木（先祖代々・50回忌までの仏・高祖大師）を専用の台に立てかけ、膳・果物・菓子・花筒・ろうそく立・線香立・鉦などを置く。 （調査時の膳はそうめん・かぼちやの煮物が各3つ。茶は5つ。花はコウヤマキ・菊と色花。）	20年ほど前までは仏壇の前の机（祭壇）をもっと大きくしていた。	57・58	大日寺（真言宗）の檀家。10日に寺で施餓鬼がある。迎えに行く。経木をもらってきて飾る。12日に坊さんに拜んでもらう。今日（12日）の夕方か明日（13日）の朝、寺へ返しに行く。
			無縁仏	玄関	サンカイサン	玄関に祀る。信太（橋本市高野口町）では外で祀っている。	59	
25	橋本市高野口 町大野	地村和夫	先祖	仏壇の前	仏壇に位牌を並べ、花筒（2）・膳（2）を置く。仏壇の前に机を置き、白い布をかけて祭壇にする。机の上には経木（先祖代々・50年回忌までの仏・高祖大師）をナスに挟んで立てる。机の上にはほかに料理・茶（4）・野菜・果物を置く。祭壇の横にスイカ・他家からの供え物などを置く。祭壇の前に机（常設）を置き、ろうそく立・線香立・鉦を置く。 （調査時の膳はご飯・煮物・豆・汁物など5品。花はコウヤマキ・オミナエシ・ホウズキと色花。）		60・61	
			無縁仏	玄関	サンカイサン	食べに来るので、中まで来ないように、玄関か廊下に祀る。段ボールにすると聞いた。ろうそくをつけるので、危ないと思ってやめた。	62	2017年8月12日

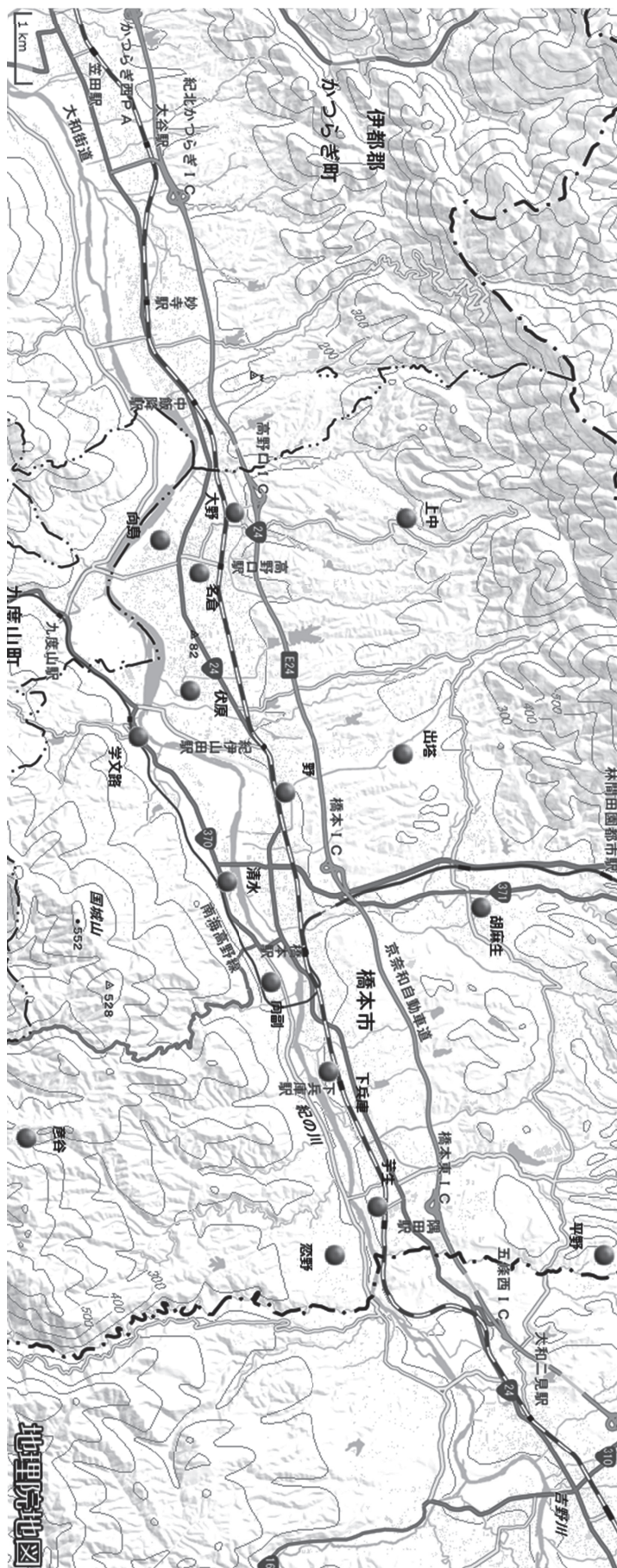
26	橋本市高野口 町大野	稲岡良	先祖	仏壇と床の間	仏壇と床の間に机を置き、白い布をかけて祭壇にする。床の間に西国33所の掛け軸を掛ける。経木（先祖代々・50回忌までの仏・高祖大師）を専用の台に立てる。経木の前に膳（3）を置く。机の上にはほかに野菜・果物・花筒（1）・ろうそく立・線香立・鉦を置く。机の周囲に遺影・花筒（1）・灯籠・他家からの供え物などを置く。 （調査時の膳はご飯・煮物など5品と茶。机の上の花はユリ・菊・ホウズキなど。周囲の花はコウヤマキ。）	63	大日寺（真言宗）の檀家。8月12日に経木迎え。今年は2日ほど早く迎えた。昼からオチャツキの餅を供える。あんころもちとお茶を供えてお接待をする。翌日は三度三度お供えする。オチャトは何回もする。13日と14日に祀る。明日（15日）の朝、土産の白い餅を供えて、お寺へ経木をお返しに行く。お供えは我流。七色汁といって、7種類の具を入れた汁を1回する。きのう本膳をした。朝は御粥と梅干しとか。 お箸は青竹。実家では父が青竹をしていた。牛と馬はしている家もある。ようしてない。実家でもしていなかった。ナスとどの線香立は実家の流儀。	2017年8月14日			
27	橋本市高野口 町向島	山本晴美	無縁仏	土間の隅	サンカイサン	葉の上に野菜を置き、花筒（1、竹）・線香立（ナス）などを立てる。 （調査時の花はコウヤマキ・菊。）	64	昔はデジマを巻いた。実家はデジマでしていた。自分はござを買ってきて巻いている。盆が終わると、くるくる巻いてセットでしまっている。帽子は使っているものをかぶせる。もうぶたへするところもある。前の家はもうぶたに載せて祀っている。この家はシンタクなので、舅、姉はサンガイサンを祀っている。良氏は橋本市南馬場の実家でしていたように祀っている。実家の母親は橋本市宇生出身。同じように祀っていた。姉が学文路（橋本市）にいる。もうぶたの上に祀っている。			
						65	経木はない。実家でもやっていた。祀り手のない人。恥ずかしがるので、立派なのにするとか訪ねにくい。こもを立てかけるといって、今はこももないので、なるべく隠すようにしてあげる。晴美氏はこの家の生まれ。おばあさんがしていたのを見よう見まねで祀っている。おばあさんもこんな感じで祀っていた。				
28	橋本市高野口 町向島	坂口武司	無縁仏	外→玄関	サンガイサン	1斗樽の上に経木（三界万霊）・野菜・果物などを置き、畳の上の部分で囲い、上に帽子をかぶせる。前には台を置き、その上に料理・茶・箸・花筒（1）・ろうそく立・線香立・鉦などを置く。 （調査時の料理はそうめんなど3品。花はコウヤマキ・キキョウ・ホウズキ・菊。）	66	母の実家は九度山の人郷。農家だった。母が嫁に来て祀った。本来は外で祀る。家で祀ってもらっていない霊を祀る。行き倒れとか。そういう人の魂を祀る。先祖と一線を引いた。この辺は米の生産地。手元にあるもんで祀った。樽・こもなど、米に関係のあるもので祀る。	67	小田の清涼寺の檀家。	2017年8月14日

29	橋本市高野口 町伏原	福井規雄				仏壇の外 の踏み石の上に、プラスチックの真を家の中に向けて縦にして置く。真の中に経木（三界万霊）と花筒を立てる。縁側には野菜・果物・茶・ろうそく立（ナス）・線香立（ナス）などを置く。横にはやかんと、茶を入れ替えたときにおける器を置く。 （調査時の花は先祖の祭壇と同じ。）	縁側の外にコンテナを伏せて置いて台にする。その上に段ボール箱を縦にして置く。縁側に野菜などを置く。			2017 年 8 月 14 日
30	橋本市高野口 町伏原	田中	無縁仏	縁側の外	サンガイサン	縁側の外にコンテナを伏せて置いて台にする。その上に段ボール箱を縦にして置く。縁側に野菜などを置く。				2017 年 8 月 14 日

表 2 橋本市の盆棚の分類

場所	形態	祭祀対象	高低、覆いなど	地域	表1の事例番号	写真
A 庭・軒先	a 松明を焚く竹を立てる 竹の花筒・線香立、供え物 (地面)		松明の竹は高い、花・供え物は低い	胡麻生	6	41
	b 松明を焚く竹を立てる 竹の花筒・線香立、供え物 (台はブロッケ)		松明の竹は高い、花・供え物は低い	平野、胡麻生、向副	1、7、14	30、25・26、49
	c 松明を焚く竹を立てる 既製品の花筒など		松明の竹は高い、花は低い	下兵庫	4	33
	d 松明を焚く竹を立てる 竹の線香立など		松明の竹は高い	下兵庫	5	35
	e 地面で松明を焚く 竹の花筒・線香立、供え物 (地面)		松明・供え物は低い	向副	13	18・46
	f 竹の花筒・線香立、供え物 (地面)		供え物は低い	大野	26	65
B 軒下・玄関先	a 台の上に経木・供え物 (台は桶・コンテナ)、ござ・すだれ・テシヤで覆う、ござなどの上部を縛り帽子をかぶせる、ござなどの横に竹の花筒・線香立 (前にも台を置いて供え物)	無縁仏	高い、隠す	平野、胡麻生、向副、大野	1、6、7、13、26	29、39・40、24・42、19・45、64
	b 台の上に経木・供え物 (台はコンテナ)、ござ・すだれ・テシヤで覆う、ござなどの上部を縛り帽子をかぶせる、ござなどの横に竹の花筒・線香立	無縁仏	高い、隠す	下兵庫	5	34
	c 台の上に経木・供え物 (台は桶・バケツ)、ござ・すだれ・テシヤで覆う、ござなどの上部を縛り帽子をかぶせる、手前に花筒など	無縁仏	高い、隠す	下兵庫、向副	4、14	32、48
	d 箕の中に経木・花筒 (箕は立てる) (縁側にも供え物)	無縁仏	高い、隠す	伏原	29	70・71
C 縁側・廊下	a 台の上に経木・供え物 (台はコンテナ、檜葉で覆う)、横に竹の花筒を縛る	新仏	高い、隠す	向副	14	47
	b 台の上に経木・供え物	新仏	高い、隠している	胡麻生	6	38
	c 台の上に経木・供え物、紙で囲う (台は桶)	(この家から出たホトケ)	高い、隠す	上中	17	51
	d 台の上に供え物	無縁仏	高い、隠している	上中	17	52
D 玄関	a 台の上に経木・供え物 (台は桶・コンテナ)、ござ・すだれ・テシヤで覆う、ござなどの上部を縛り帽子をかぶせる、ござなどの横に竹の花筒・線香立 (前にも台を置いて供え物)	無縁仏	高い、隠す	向島	28	67
	b 台の上に段ボール (台は机)、段ボールの中に経木・供え物	無縁仏	高い、隠す	向島	27	66
	c 下駄箱の上に経木・花筒・供え物	無縁仏	高い、隠している	野、大野	9、24、25	43、59、62
	d 箕の上に花筒・供え物	無縁仏	隠していない	野		

E 床の間・座敷・仏壇の前	a 居間に机、机の上に経木・花筒・供え物、机の横に衝立	無縁仏		名倉	20	54
	b 床の間の前に机、机の上に経木・花筒・供え物	無縁仏		名倉	19	53
	c 床の間と仏壇の間に祭壇、祭壇の上に位牌・花筒・供え物	先祖		大野、伏原	26、29	63、68・69
	d 仏壇の前を中心に祭壇、机の上に経木・花筒・供え物	先祖		上中、大野	17、24	50、57
	e 仏壇の前を中心に祭壇、机の上に経木・供え物、仏壇に花筒	先祖		向副、大野	13、25	20・44、60・61
	f 仏壇の前に祭壇、仏壇に位牌・経木	先祖		平野、下兵庫	1、4	28、22・31
	g 仏壇に位牌、経木、仏壇の前に供え物	先祖		胡麻生	6、7	36、23



地図 1 橋本市 (国土地理院の電子地形図に加筆)



写真1 向副から橋本（北側）を望む（2016年8月4日撮影）



写真2 平野の集落と水田（南を望む、左側が落合川、川より左が奈良県）（2016年8月13日撮影）



写真3 下兵庫の集落と地藏寺（2016年8月14日撮影）



写真4 下兵庫の集落（南を望む）（2016年8月4日撮影）



写真5 利生護国寺（2016年8月4日撮影）



写真6 胡麻生の集落（北を望む）（2016年8月14日撮影）



写真7 野を通る旧大和街道・JR和歌山線・国道二四号線（2016年8月5日撮影）



写真8 向副の集落と水田（南を望む）（2016年8月13日撮影）



写真9 九度山町慈尊院から北東（高野口町方面）を望む（2015年8月2日撮影）



写真10 上中の集落と弘法寺（2017年8月12日撮影）



写真11 JR高野口駅と旅館（2015年8月2日撮影）



写真12 名倉の町並み（写真奥が高野口駅）（2015年8月2日撮影）



写真 13 大野の集落と水田（南西を望む）（2017年8月14日撮影）



写真 14 大日寺（厳島神社の祭礼行列）（1999年10月10日撮影）



写真 15 瀬崎家の井戸（2016年8月14日撮影）



写真 16 時光寺裏の墓（2016年8月13日撮影）



写真 17 平野の墓地（2016年8月13日撮影）



写真 18 松井家の迎え（松明） 松井（2016年8月13日撮影）



写真 19 写真 18 に同じ（無縁仏）（2016 年 8 月 13 日撮影）



写真 20 写真 18 に同じ（先祖の祭壇）（2016 年 8 月 13 日撮影）



写真 21 地藏寺の三界万霊塔（2017 年 8 月 14 日撮影）



写真 22 瀬崎家のキュウリの馬とナスの牛（2016 年 8 月 14 日撮影）



写真 23 井向家の送り（先祖の祭壇）（2016 年 8 月 14 日撮影）



写真 24 写真 23 に同じ（無縁仏の棚）（2016 年 8 月 14 日撮影）



写真 25 写真 23 に同じ（松明）（2016 年 8 月 14 日撮影）



写真 26 写真 23 に同じ（松明）（2016 年 8 月 14 日撮影）



写真 27 地藏寺に納められた経木（2017 年 8 月 14 日撮影）



写真 28 先祖の祭壇（表 1 の 1、平野）（2016 年 8 月 13 日撮影）



写真 29 無縁仏の棚（写真 28 に同じ）



写真 30 松明を焚くところ（写真 28 に同じ）



写真 31 先祖の祭壇（表 1 の 4、下兵庫）（2016 年 8 月 14 日撮影）



写真 32 無縁仏の棚（写真 31 に同じ）



写真 33 松明を焚くところ（写真 31 に同じ）



写真 34 無縁仏の棚（表 1 の 5）（2016 年 8 月 14 日撮影）



写真 35 松明を焚くところ（写真 34 に同じ）

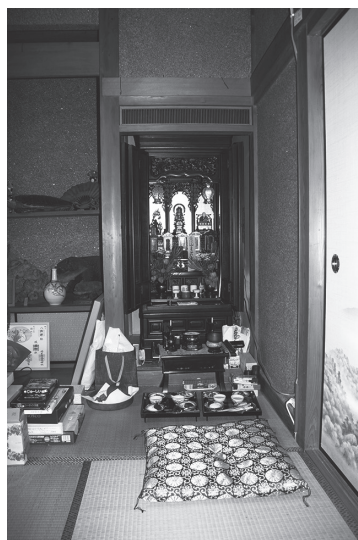


写真 36 先祖の祭壇（表 1 の 6）（2016 年 8 月 14 日撮影）



写真 37 先祖の祭壇の膳（写真 36 に同じ）



写真 38 新仏の棚（写真 36 に同じ）



写真 39 無縁仏の棚（写真 36 に同じ）



写真 40 無縁仏の棚（写真 36 に同じ）



写真 41 松明を焚くところ（写真 36 に同じ）



写真 42 無縁仏の棚（表 1 の 7）（2016 年 8 月 14 日撮影）



写真 43 無縁仏の棚（表 1 の 9）（2016 年 8 月 14 日撮影）



写真 44 先祖の祭壇（表 1 の 13）（2016 年 8 月 13 日撮影）



写真 45 無縁仏の棚（写真 44 に同じ）



写真 46 松明を焚くところ（写真 44 に同じ）



写真 47 新仏の棚（表 1 の 14）（2016 年 8 月 13 日撮影）



写真 48 無縁仏の棚（写真 47 に同じ）



写真 49 松明を焚くところ (写真 47 に同じ)



写真 50 先祖の祭壇 (表 1 の 17) (2017 年 8 月 12 日撮影)



写真 51 家から出たホトケの棚 (写真 50 に同じ)



写真 52 無縁仏の棚 (写真 50 に同じ)



写真 53 無縁仏の棚 (表 1 の 19) (2017 年 8 月 12 日撮影)



写真 54 無縁仏の棚 (表 1 の 20) (2017 年 8 月 12 日撮影)



写真 55 先祖の祭壇(表1の21)(2017年8月撮影、三島英雄氏撮影・池田和夫氏提供)



写真 56 無縁仏の棚(写真55に同じ)



写真 57 先祖の祭壇(表1の24)(2017年8月12日撮影)



写真 58 先祖の祭壇の経木と膳(写真57に同じ)



写真 59 無縁仏の棚(写真57に同じ)

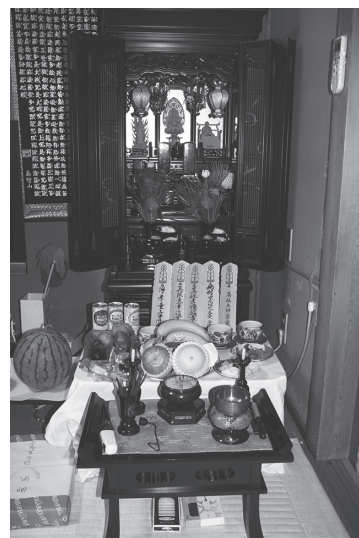


写真 60 先祖の祭壇(表1の25)(2017年8月12日撮影)



写真 61 先祖の祭壇の経木（写真 60 に同じ）



写真 62 無縁仏の棚（写真 60 に同じ）



写真 63 先祖の祭壇（表 1 の 26）（2017 年 8 月 14 日撮影）



写真 64 無縁仏の棚（写真 63 に同じ）



写真 65 松明を焚くところ（写真 63 に同じ）



写真 66 無縁仏の棚（表 1 の 27）（2017 年 8 月 12 日撮影）



写真67 無縁仏の棚（表1の28）（2017年8月14日撮影）



写真68 先祖の祭壇（表1の29）（2017年8月14日撮影）



写真69 先祖の祭壇の経木と膳（写真68に同じ）



写真70 無縁仏の棚と縁側の供え物（写真68に同じ）



写真71 無縁仏の棚（写真68に同じ）